第一回

高野山大学
ラマ教文化調査団

報告書

LADAKH, SUMMER, 1977

はじめに

高野山大学学長　**中川善教**

中国陝西省の西安から西域地方への路は、その昔隊商達が駱駝を連ねて絹を運んだ路であり、それは同時に仏教が伝えられた路でもある。西南へ開けた路の玉門関を過ぎて西に進めば、玄奘三蔵が七世紀にここを通って、「城郭は嵓然たれども、人烟は断絶せり」と記録している、タクラマカン沙漠のロプノール湖の傍の楼蘭がある。そこを真直ぐ南へ下がると、崑崙山脈をつきぬけてチベットのラサの西を通ってブータンに達する。ブータンの西にシッキムがあり、その西にネパールが南から西北へかけて斜めに位している。これらの国々はヒマラヤ山脈に添って、東南から西北へ伸びているのであるが、ネパールの南に西北へ走るシワリク山脈があって、その西北、つまりインドの西北になるのであるが、パキスタンとの国境に近くラダックがある。ネパールを中心としてこれらは何れもチベットの文化圏にある。中にラダックはその土地辺陬に位すと雖も、辺陬に位するが故に却って古さと純粋さを保って、西チベット或いは小チベットと呼ばれるに相応しいものを持っているのである。ブータン・シッキム・ネパールなどと共に、久しく外国の者を拒否し続けていたのが、三年前の一九七四年に、外国人にその門を開いた。解禁と同時に逸早く秘境に仏教調査に入った報告が、新聞雑誌に載って、大いに関心を喚んだものである。これらの国には他の仏教国に見られぬ密教が厳然として生きているのである。ブータン・シッキムと共に、ラダックがわれわれに強い関心を誘う所以である。

機縁至って爰に本学に第一回のラマ教文化調査団が組織され、六月二十六日に日本を立って短い期間であったが、かなり密度の高い成果を挙げ得た。調査団顧問の酒井学部長を中心とする経典班、団長松長教授の壁画や彫刻の調査班、庄司助教授の風俗・習慣を調査する民族班共に、それぞれに成果を挙げ得たことは、四千メートルを越すという高地のゴンパにおける調査の困難を思い、現地の人々の協力も併せて感謝に堪えないところである。この報告書に盛られるところは、成果の僅かな部分に過ぎないのであるが、ラダックは予想以上の豊富な資料を持つと聞くからに、第二回、第三回の調査団を組織して調査研究の行われることを嘱望に堪えぬ。諸先生の毎日の多忙と、資金の面でも問題は多いが、何とか隘路を克服して戴きたいものである。高祖大師は『十住心論』第二に訓されてある。「昇墜は他の意に非ず、衰栄は我が是非なり。」

終りにこの度の調査行で欣快に堪えないことは、浜松鴨江寺の国際仏教徒協会の好意で、チベットのツプテン・T・ギャツオ師を本学に一年間配属され、その後本学の外人教師として勤務願っているが、越智講師などその成果により、現地の会話に大いに力を発揮したということである。

昭和五十二年師走二十四日

(上) ティクセ・ゴンパ全景
(左) シェー・ゴンパ下の石に
刻まれた五仏

(下左) ヘミス・ゴンパ正面
(下右) フォト・ラ峠付近

(上左) シェー・ゴンパ

(上右)
レー市内の
チャンスパ・チョルテン

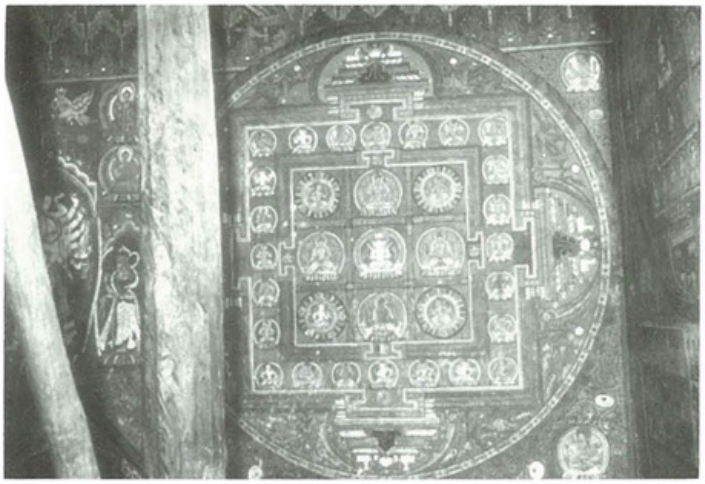
(中左)
歓喜仏：スピトク・ゴンパ

(中右) アルチ村の僧侶

(右) スピトク・ゴンパ
仏像、祖師像

アルチ・ゴンパ

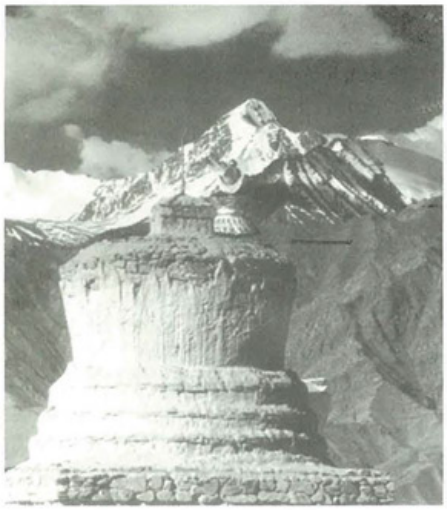
（上左）三層堂正面
（上右）三層像二階 弥勒仏頭部
（左）三層堂二階 壁画
〔曼荼羅 中尊：
智拳印の大日如来〕



（左）三層堂 二階壁画
〔十一面観音菩薩〕

（右）三層堂
一階 仏像下半身

（下）アルチ村民の読経



（上左右）レー市内スナップ
（右）アルチ村の老婆
（下左）寺院調査風景
（下中）少　年　僧
（下右）レー市内 婦人

（右）仏教哲学学校長と隊員
（左）食事風景

目　　次

はじめに……中川善教……1

ラダックの密教……松長有慶……7

インド西北部・ラダック・レーにおける仏教文献調査報告……酒井真典……10

ラダック密教見聞記……越智淳仁……14

ラダック地方に見られる二種の壁画について……頼富本宏……19

アルチ村に滞在して……宮寺密正……24

朝の勤行—シャンカル寺院—……塚本佳道……26

チベット難民キャンプ……佐藤元宣……27

学生班のこと……常多　昇……29

写真担当として……田中博之……31

ラダック行の医療担当報告……西谷　正……32

チベット旅行雑感……庄司荘一……34

ラダック点描……広安俊道……36

ラダックのラマ教寺院を訪ねて……天野宏英……38

寺院諸堂内の仏像壁画について……小林暢善……39

日程、地図、装備、会計、団員名簿……48

写　　真……2～5

寺院配置図……55

ラダックの密教

松　長　有　慶

久しい間、外国人を寄せつけなかったインドのラダック地方は、1974年の夏に、その門戸の一部を開いた。ヒマラヤの秘境に入域する許可が出たとの朗報は、世界の山岳界だけではなく、仏教学者からも歓声をもって迎えられた。そこにはすでに本国で消滅してしまっているチベット仏教が、タイムカプセルに包まれたまま現存していると伝えられていたからである。

翌年の夏、鷲見東観愛知大学教授を隊長とするラダック仏教調査隊が現地に足を踏み入れ、調査にあたった。そのときの隊員の一人でもあり、解禁の年にすぐさま単独でも訪れた経験をもつ石黒淳氏は、帰国後、数種の新聞、雑誌、研究誌に、美術史研究者としての調査報告と紀行文を掲載し、日本の仏教学界のみならず、一般の人々に対しても、ラダックの仏教と民俗を紹介した。

イギリスのチベット学者で、ヒマラヤ地区の多くの秘境を踏破した経験をもつスネルグローブ博士も、早速この地を訪れ、長期間滞在して調査にあたった。その報告書の第一分冊はすでに公刊されている。

高野山大学においても、ラダック地方入域の解禁と同時に、調査団の派遣を計画し、その準備を進めていった。チベット系の仏教は大乗仏教を基調とするが、それが繁栄した時期がインドの後期密教の時代に当るために、密教的な色彩がきわめて強い。ラダック地方は、中国チベット自治区とパキスタンとの国境に近いインド国内にはあるが、従来、小チベットとか、西チベットとか呼ばれてきたように、この地方の文化や生活習慣はチベット系のものがほとんど大部分を占めている。五千メートルから七、八千メートル級の万年雪におおわれたヒマラヤの山山に取り囲まれたラダック地方は、歴史的にみても外国の軍事的、文化的な支配を受けることが少なく、中世以来のチベット系の仏教文化がほとんど無傷のままに温存されている。

民衆は一部のイスラム教徒とかヒンズー教徒、ほんの一握りのキリスト教徒を除けば、大多数はチベット系の仏教、いわゆるラマ教を信仰している。ゴンパと呼ばれるチベットの寺院には、一部に無住のものもあるが、多くはラマ僧が住む。中にはヘミスゴンパのように数百人のラマが居ると称している寺院もある。これらのゴンパでは、通常数名の常住のラマたちによって、経典読誦や密教の儀礼が朝夕行われている。彫刻、絵画なども、インドの後期密教の系統に属するものが圧倒的に多い。

高野山大学では1970年にネパールのナムチェ地方に、ラマ教文化の調査のために、２名の先遣隊を送り、翌年には６名からなる第一次ネパール学術調査隊を、ネパールのロールワリン地区に派遣し、チベット密教の研究調査を実施した。そのとき隊員の１名は２ヵ年余りひきつづいてカトマンズに滞在し、また隊員の他の１名は、生活条件の悪い奥地ベディングのゴンパに１ヵ年ラマ僧となって止住し、その調査の徹底を期した。

高野山大学におけるチベット密教についての現地調査と研究は、このような実績を踏まえて進められてきたのであるが、その後、主として経済的な理由によって、第2次以降のネパール学術調査隊を送ることができなかった。こうした中で、チベット密教の研究熱も一頓挫をきたしたかとも思えた。しかし1974年の小チベット、ラダック地方に対する外人の入国許可のニューズが入って、その熱はもう一度もえあがった。

第1回のネパール奥地の学術調査の結果、現地での調査活動には英語がほとんど役に立たずその土地の言葉を習得しておく必要性を痛感した。2名の隊員を後に残したのも、一つには次回の本格的な調査にそなえ、ネパール語の会話の習得を期待したからでもあった。

幸いなことに、ラダック解禁とほぼ時を同じくして、浜松の国際仏教徒協会より、チベット人の学僧ニッチャンリンポチェが高野山に派遣され、翌年から大学の外人教師として、チベット語会話の指導にあたることになった。そのレッスンの受講者は、目にみえてチベット語の会話に堪能になっていった。

前回のネパール学術調査隊の隊長をつとめた経験をもつ松長が責任者となって、チベット密教学の権威である酒井真典教授を顧問とし、チベット語講座を担当する越智淳仁講師、中国学の庄司荘一教授、インド後期密教の専門研究者である頼富本宏種智院大学助教授を核として、教員と学生14名からなる高野山大学第1回ラマ教文化調査団が結成され、調査の準備が進められていった。

日本を出発して以来、6日目にあたる7月1日の夕方、目ざすラダック地区の中心地レーに調査隊は到着し、翌々日から活動を開始し、そのうち半数は7月13日に帰国し、残る半数は月末まで現地にとどまって調査を続行した。期間が短かかったため、3班に分かれて行動をせざるを得なかった。すなわちゴンパに所蔵されている経典を中心として記録をとる経典班、ゴンパの壁画や彫刻を調べる図像班、この地方に住む人々の風俗、習慣に調査の焦点を置く民俗班である。

筆者は団員全員の研究活動の掌握につとめるとともに、ゴンパの壁画、仏像などを重点的に調査し、それらを生み出した密教の思想背景をつきとめる仕事を分担した。その結果、明らかになった成果は、日本密教学会の第10回学術大会において紹介した。この学会の機関誌である「密教学研究」第10号に、よりくわしく報告する予定であるが、ここでは一応、その要点のみ記しておこう。

筆者の調査した範囲において特筆すべきことは、つぎの二点である。まずその一は、智拳印を結ぶ大日如来が発見されたことであり、第二は金剛界の五智如来に、印契、身色、乗物などの点で、定型と目されるものを数例見出したことである。

中国、日本の密教では、金剛界の大日如来の印は智拳印に定まっている。一方、チベットとか東南アジアの密教の系統では、智拳印ではなく、ボーディアンガといわれる転法輪印を結ぶのが通例であるとされてきた。ところがラダック地区のシェーゴンパの下にある石に刻まれた五仏に一例と、アルチゴンパの三階建ての堂（スンチクハカン）の二階の壁画に三例、同じくアルチゴンパの大日堂（ナムナンハカン）の壁画に二例、智拳印を結ぶ大日如来が発見された。

シューのは一面、他のは四面である。後期のインド密教の中で、転法輪印の大日如来が優勢である中にも、智拳印の伝統も保たれて、実際に像が作られていたことがこれによってわかる。金剛頂経系統の密教の発達にとって、注目すべき問題を提供するものである。

つぎに金剛界の五仏、つまり五智如来はチベット密教では、壁画、彫刻、タンカ（画布）に作例が多い。それらの印契、身色、乗物などの組み合わせは、本来一定しているべきものであるにもかかわらず、現実にはそれらの統一のとれた作例を見ることは少ない。ネパールの第1回の学術調査の時には、ボータコシ河流域のムデゴンパの本堂の上部の壁画と、トウルパカルからシェディングにいたる道の傍にあったツァカン（石造で中に五仏を板に画く）にまつられていた五仏に本来の形のものを発見しただけであった。その他の圧倒的多数は五仏のいずれか、あるいは全部が定型を守っていない。儀軌を参照せずに、口伝えあるいは記憶だけで、ラマが五仏を画き、あるいは彫んだためであろう。

今回の調査によって、ラダック地区には、フィアンゴンパの壁画と、アルチゴンパの三階建ての堂と、大日堂の五仏は、いずれも印契と身色において定型のものであることを確認した。これによって、ラダック地区の創立の古いゴンパには、由緒正しい密教が入っていたことが推測されるのである。

経典班、民俗班それぞれ有意義な成果を収めて帰り、第1回のラダック派遣は、短期間の調査としては、まず成功であったといってもよいと思う。ただ団員それぞれ多忙な日常の仕事をもつ者であったこと、経済的にも恵まれていなかったこと。三千メートルを越えた高地での調査活動は各人に大なり、小なりの身体的な変調をもたらしたことなどによって、調査活動の期間を短縮せざるを得なかったことは残念であった。

ラダック地区は仏教美術の分野だけではなく、インド密教、チベット仏教の研究にとってもまた、かけがえのない無限の宝を秘めていることが、今回の調査によって判明した。今後の継続的な調査活動によって、インド密教、チベット仏教の研究に、ラダック地区の文化が多大の寄与をもたらすであろうことは疑いえない。

レーの南にそびえるヒマラヤ山脈の西端ザンスカール地方の山間の村落に点在するゴンパの調査は、まだ手がつけられていないままである。時間と資金に恵まれさえすれば、なんとしてでも第2次、第3次の学術調査隊を、ひきつづいておくりこみたいものである。ネパールの奥地でも同様であるが、ラダックでも、ヒンズー教徒の政治的、社会的な力に押されて、チベット文化は急速にその純粋性を失いつつある。外国人の解禁によって、ラダックも次第に観光地化し、もともと荒廃のはげしいゴンパが原型をとりとめもなく損っていく例も見られた。危機である。早い時期に、総合的な調査を進めておかないと、とりかえしのつかないことになりはしないかと案ぜられる。密教とチベット学、それに仏教美術の専門学者を網羅した調査団が、年数をかけて綿密な研究を行うならば、必ずや学界を裨益する成果が得られるであろう。　秘境ブームにおどらされて訪ねる物珍しげな観光客の手だけに、ラダックはまかせてはおけないのである。

（高野山大学教授）

インド北西部ラダック・レーに於ける仏教文献調査報告

酒　井　真　典

調査団の調査目的は多岐に渉ったが、筆者と越智講師とは主として滞在地レー（Gle）に於ける仏教文献の調査に当った。筆者はかつて中国に於て同種の文献を調査した経験を持つので、これは実際に実物に接した者でないとその弁別がつかないものがあるからである。

チベット仏教即ちラマ教のもつ主なる文献とは、蔵内大蔵経や蔵外各種の祖師達の全書類に分けられる。尚教科書（yig cha）やその他の小部（thor bu）のものは除くことにした。

ラマ教の持つ蔵内たる大蔵経は漢訳大蔵経と異なり、仏の教説としての仏説部（bkaḥ ḥgyur）と、論師達の著述としての論蔀部（bstan ḥgyur）の２部に分かれている。尚これには版木の作られた所在地によって夫々の呼称があり、又内容も幾分相違せるものがある。主なるものの名は次の如くである。

デルゲ版（sde dge par ma）甘珠爾・丹珠爾
ナルタン版（snar thaṅ 〃 ）〃　〃
チョーネ版（co ne 〃 ）〃　〃
ペキン版（pe cin 〃 ）〃　〃
ラッサ版（lha sa 〃 ）〃　〃

ラダック・レーに於ては多くの寺々がある。これをチベット語でゴンパ（dgon pa）（静かな所）と呼ぶ。その成り立ちは、高い高い山の万年雪が夏になると幾分とけ、これが低所を辿り山間の所に湿地帯が出来る。これに樹木が生え、段々広がりオアシスが出来、住民が住みつきかくして住民の精神の拠り所としてゴンパが建てられ、僧が住みつくと言った有様であって、在所の名が即ちゴンパの名である。寺には本来の名前が別にあるが、一般人には在所の名がゴンパの名となっているのである。寺があれば、その教義のより処としての大蔵経をチベットから購入し、伝持されるといった状態である。以下は調査した順序によって夫々の寺の大蔵経の名や帙数を報告することにする。

この中で注意すべきことは中国との関係である。中国に於いても北京版の大蔵経やチベットの祖師達の全書類が出版されているが、レーに於いては、筆者達の調査せる限り一部の北京版大蔵経も見受けられなかった。レーに於ける民衆の服装や食物の中に各種の中国式のものはあったが、これはチベットを介しての影響であったもののようである。しかしこの度のはラダックのレーのみの調査であるが、近くのザンスカール（Zaṅs dkar）にも尚多くのラマ寺院が存在するとの事であるから、これを調査すれば更に明らかになることと思われる。

以下は調査した各寺の大蔵経類の名と帙数と、わかる限りのその寺の略歴やお祭りの事等も共に報告することにする。巻末にレー周辺の略地図を示し、各ゴンパの所在地や所属する宗派を記入することにする。

① サムカル（bsam dkar）ゴンパ＝浄願寺　ゲルクパ

ⓐ 十万頌般若（大般若経）16帙

ⓑ ナルタン版甘珠爾 103帙

バクラ（Ba ku la）の創建　ペーグン寺の支院

② レー（Gle）ゴンパ＝主（釈迦）寺　派なし

ⓐ ラッサ版甘珠爾 101帙

ⓑ 八千頌般若

ⓒ エンサイクロペディア・ティベチカ（1揃）

1957年当地仏教々会の建立。

③ レーゴンパ・ソマ（gso ma）＝新寺　カギュパ

ⓐ パルシン（版木）多数有

④ レーカル（Gle mkhar）ゴンパ＝レー城寺

レーはラダックの首都である。ダクパブンデ（grags pa ḥbum lde）が1400年から1440年にかけて作ったトウ（stod）の首都である。弥勒（Maitreya）が主尊にして、大黒（Mahā kāla）堂の下には、蒙古兵の戦った当時の死体が埋めてあると言われる。

ⓐ ナルタン版甘珠爾　88帙（不完）

⑤ ハカンマルポ（lha khaṅ dmar po）＝赤堂

⑥ チェモゴンパ（rtse mo）＝頂上寺　城内

⑦ ヘミ（He mi）ゴンパ　カギュパ

菩提法寺（byaṅ chub chos gliṅ）又は真言法寺（gsaṅ sṅags chos gliṅ）の名がある。　レーから48kmの所にあり、インダス河の反対側にある。350年前にタクチャンレーチェン（stag tshaṅs res chen）が建てた。現在トウクセー（thugs sras）リンポチェが在住しなかなかの傑物である。この地のボス的存在でもある。祭はヘミのチェチュ（tshes bcu）として毎年チベット暦の5月9日から10日にかけ、パドマサンババ（padmasambhava）を祭り、申年には特に有名で、全山が解放され種々の宝物が展示される。

ⓐ デルゲ版丹珠爾 214帙

ⓑ ナルタン版丹珠爾 225帙

ⓒ ラッサ版甘珠爾 101帙

ⓓ 優秀なタンカ類を多く蔵する。

⑧ グーツァンハカン（dgos mtshaṅ lha khaṅ）＝満願堂　カギュパ

この堂はヘミゴンパの裏山にあり、開基ゲワ　グゥ　ツァンパ（rgyal ba rgod tshaṅs pa）の修行所でヘミゴンパの前身の堂である。

ⓐ デルゲ版甘珠爾 101帙

⑨ チチェー（khrigs rtse）ゴンパ　ゲールクパ

レーから19kmの所にある。チチェー谷の上にタークモハカン（stag mo）とも言う。530年前トゥ（stod）のセラブサンポ（ses rab bzaṅ po）が建て、その甥のパンデンセラブが大きく

した。現在キャブゼケンポ（skyabs rje mkhan po）活仏が在山し、九(日)施食(dgu gtor)の祭が毎年12月の17日から19日迄行われる。　この寺はリンチェンサンポ（rin chen bzaṅ po）が昔建てた寺のあとと言われる。

ⓐ　ナルタン版丹珠爾 200帙

ⓑ　ラッサ版甘珠爾 101帙

⑩　シェー(śel)ゴンパ　カギュパ

レーから16kmの所に古い城塞と共にあり、500年前の建立と言われる。三階突き抜けの金色の釈迦牟尼如来の大像が在って有名である。その寺の下の裾に松長教授の報告した智拳印大日を中心とした五仏の刻壁がある。1月30日と7月10日に大きな祭がある。

ⓐ　写本の甘珠爾 100帙

⑪　仏教哲学学校（School of Buddhist philosophy）

仏教の哲学学校とあるけれども、現在は小、中学程度の個人的な学校である。高野山上のリンポチェの師にあたるクンチョクテンジン（dkon mchog bstan ḥdsin）師は、授業の弟子になる者がいないから、かかる学校を開いているが、希望者があれば中観や唯識等の高等教育を施すと言っておられた。その学校のペカン（図書館）(dpe khaṅ）には

ⓐ　ラッサ版甘珠爾 101帙

ⓑ　全書類　　150帙

ⓒ　インド、チベット等に関する欧文の著書、辞典類が多く蔵されている。

⑫　サプー（Sa phud）ゴンパ　カギュパ

住持が不在で調査できなかった。

ⓐ　ラッサ版甘珠爾 101帙

⑬　ピーツク(spi thug)ゴンパ　ゲールクパ

寺院名をサムテンリン（bsam gtan gliṅ）＝禅定寺と言い、多羅菩薩をお祭りしていた。

ⓐ　ラッサ版甘珠爾 100帙

ⓑ　デルゲ版甘珠爾 200帙

ⓒ　タンカ類を多く蔵する。

⑭　チーワン（phyi dbaṅ）ゴンパ　カギュパ

寺名をターシチュゾン（bkra śis chos rdsoṅ）吉祥法林といい、レーの西17kmの所に在りチワンの丘の上にそびえる。450年前にジクテングンポ（ḥjig rten mgon po）の開基。1月17日から19日法要がある。トクデン（rtogs ldan）リンポチェが在寺している。

ⓐ　ラッサ版甘珠爾 100帙

ⓑ　写本のソンチェンガンポのカンブン、歴史等。

⑮　アルチ（A lci）ゴンパ　ゲルクパ

チューコル寺（chos bskor）即ち転法輪寺と言われ、三層の本堂有り、五つの仏堂を持つ。レーから69kmの所に在り、インダス河の反対側にあり、橋をジープで渡って途中まで行くことができる。　本堂はインド・カシミール風であって、リンチェンサンポが900年前に建てた

ままのものと言われる。この中に多くの壁画があって有名である。

ⓐ ナルタン版甘珠爾 100帙

⑯ タナ（stag sna）ゴンパ カギュパ

レーから25kmの所に在り、インダス河の反対岸にある。この寺は空に飛び上る虎のような形をした丘の上にそびえている。その虎の鼻に建てられているので虎鼻の名がある。カシミール風の観音像があり、支院が多く有る由である。

ⓐ ナルタン版甘珠爾 101帙

ⓑ 多くの全書類を蔵す。

⑰ カールマ・ドゥペイリン（karma sgrub paḥi gliṅ）事業成就寺 派不明

ⓐ デルゲ版甘珠爾 100帙

ⓑ ニンマ派の十万タントラ

ⓒ 大般若

⑱ マントウ（maṅ spros）ゴンパ ＝多喜寺 サキャパ

ⓐ 写本の大般若2種 16帙ずつ

ⓑ 刊本の八千頌般若 21帙

⑲ ラーマユル（bla ma gyul）ゴンパ カギュパ

又の名をユンドウンゴンパ（yun druṅ）吉祥字寺と言う。レーから北に126kmの所、道路の下にある。伝説によると、ここは昔大きい湖のふちであり、そこにトウモロコシが流れ着きスワスティカ（svasti ka＝卍字）の形になっていたのでかく言われる。インドの苦行者ナーローパ（Nalopa）が11世紀頃に来て修行したとも言われる。チベット暦の2月の28日から29日に有名なユンドウンカギュ（yuṅ druṅ bkaḥ brgyud）と呼ばれる祭が行なわれる。トクデン活仏が在職している。

ⓐ ナルタン版甘珠爾 100帙

ⓑ ラッサ版甘珠爾 100帙

⑳ ルーキル（klu ḥkhyil）ゴンパ ＝龍巻寺 ゲールクパ

別名はガンデンダルゲーリン（dkaḥ ldan dar rgyas gliṅ）＝大極楽寺と称し、レーから西52kmの所にあり、現在リキル（li kir）と訛称せらる。毎年12月27日から29日にかけ、クトル（dgu gtor）と称するお供物を捧げる大祭がある。ガーリ（mṅaḥ ris）リンポチェと称する活仏が在職する。尚この寺は黒龍（Kriṣṇa）と徳叉迦龍（Tokṣaka）の両龍によって囲まれている。寺名はこれに由来する。

ⓐ ナルタン版甘珠爾 100帙

ⓑ ナルタン版丹珠爾 223帙

ⓒ ダライラマカンブン 30帙、ナムタル（歴史）40帙、テルマ20帙、ジェリンポチェ全書50帙、パンチェンリンポチェカンブン50帙、キャブリンポチェカンブン40帙、その他の全書30帙。

㉑ タクテク（phrag theg）ゴンパ ニンマパ

この寺は通称ラダックゴンパと言われる。レーにおける唯一のニンマ派の寺院でもある。

ⓐ ナルタン版甘珠爾　101帙

以上のように前ダライラマによって発願刊行されたラッサ版甘珠爾が多くの寺々に所蔵されているのが特徴である。

ラダックの首都であるレーは3500ｍ以上の上にあり、空気は稀薄であるが、春夏は日光の直射があるため雪溶けの水があるので飲料水にこと欠かない。日本の如くそのまま飲めることはうれしい。植物も割合よく育ち、量は少ないが大麦小麦等が収穫され、野菜、果物類も得られる。インドとの交通も、５月頃から10月中頃迄に種々の車によって行なわれている。電燈も火力で夜９時より11時まで点燈されていた。街中のバザールでのショッピングも片言のチベット語で通じ、ここではチベット語（古い型の発音であるが）さえ知っておれば何も不自由はないようである。

ラマ教の実際の研究や受法はこれからである。ラマ教の教義や実践法の相通ずる我が密教徒が、かかる地に長く滞在して、この地が俗化しない前に本当のチベットの仏教並に密教を受得し、他にも教えられるような人が早く出られるよう切望する次第である。

（高野山大学教授）

ラダック密教見聞記

越　智　淳　仁

今回の調査では、３班に分かれて調査を行なった。そこで、酒井教授と私は、ラダック（La dvags）の仏教文献—チベット大蔵経と蔵外文献—の調査を担当した。この仏教文献についての調査報告は酒井教授より報告された。したがって、私は以下の四項目について報告し、義務を果すことにする。

〔一〕ゴンパの概観

ゴンパ（dgon pa）はツォカン（tshogs khaṅ集会堂）とハカン（lha khaṅ仏殿、本堂）とシムチュン（gzim cuṅリンポチェのお部屋）とラブセー（rab gsel図書館）とクンカラワ（kun dgaḥ ra ba僧坊）とから構成されている。大規模なゴンパでは上記の建物が多数あり、したがって、ラマ僧（bla ma）の数も多く、壮観である。

１）ゴンパとは寺院、僧院を意味し、多数のラマ僧達が修行している。建物の外観はそれぞれのゴンパによって異なるが、概して村落のある丘の上にあり、水に不自由しない所にある。ゴンパの構成は以下に述べるとおりである。

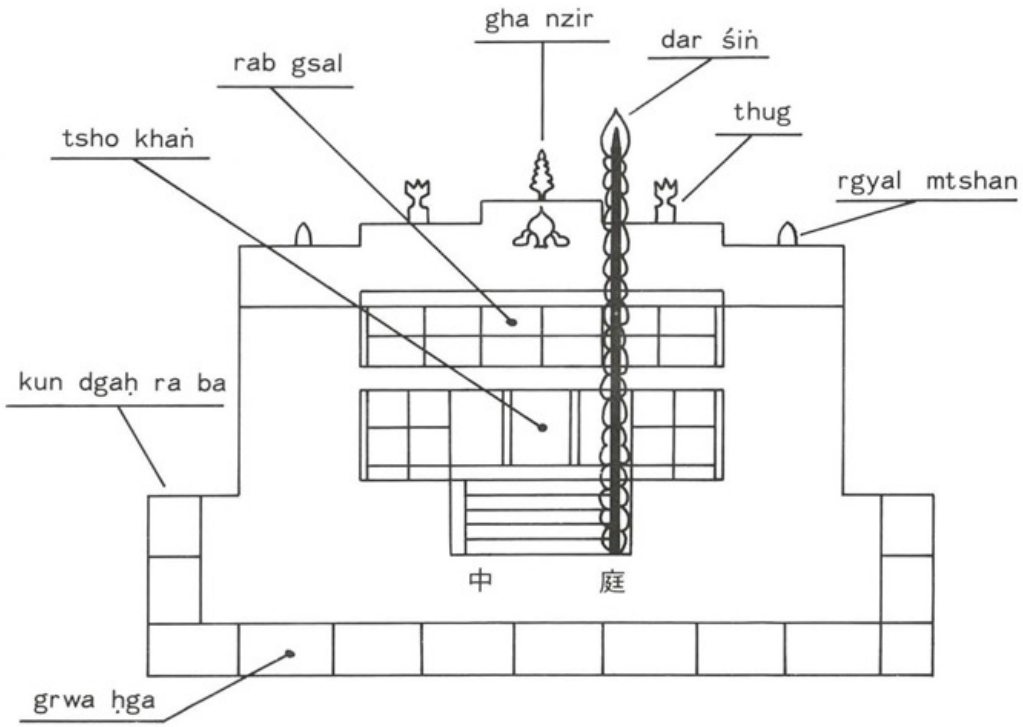
２）ツォカン（集会堂）は、その堂内中央の正面にリンポチェ（rjn po che活仏）の御座所（bshugs gdan）がラマ僧の座よりも一段高く設けられ、入口に向って座るようになっている。又、ラマ僧達の座もリンポチェの御座所の両脇から入口に向って、二列か四列あ

り、高さは30cm程で、向い合うように設けられている。又、ラマ僧の座は奥から高僧の順に並ぶようである。堂内には種々の仏像（sku 'dra）を祭り、燈明（sgron ma） と水を満した七器（bdun tshar）を供えるが、線香は見当らなかった。パルカン（par khaṅチベット大蔵経を一帙づつ入れる本箱のような経函）がラブセー（図書館）に置けない場合は、それを堂内の両側に置いている。 この堂はラマ僧達が朝の勤行（shogs chos）をしたり、リンポチェが檀信徒に説法する時に使用し、それ以外の時は鍵（lde mig）が掛っている。この鍵はクンニェル（dkon gñer鍵持ち）が常に持っていて、その都度開けるのである。したがって、クンニェルはゴンパ内でかなりの権力と信用とをもったラマ僧が当たっている。朝の勤行の際、読経の切目切目にチベット茶（プッジャbod jaお茶にバターとミルクと食塩を混ぜたもの）を飲み、最後に少し残したお茶で練ったツァンパを食べる。チベット人達は一日に何十回もお茶を飲む。そうしなければ、乾燥した高地では身体がもたないのである。

3）ハカン（仏殿、本堂）

ハカンは本尊（sku 'dra,yi dam gyi lha本尊または守護神）を安置する堂の総称であり、どのハカンにも中央に本尊が安置され、その本尊によって、ビルシャナ堂（rnam snaṅ khaṅ アルチゴンパにはこのお堂がある）というように本尊の名称で呼ばれるが、単にハカン

サンカルゴンパの外観



とも呼ばれる。このハカンはツォカンの奥にあったり、二階にあったりし、又、別に一建立のものもある。ツォカンもハカンもともにその周囲の壁にはすばらしい極細色の曼荼羅等の壁画が画かれ、タンカ（thaṅ ka画布）が掲げられている。

4）シムチュン（リンポチェのお部屋）

シムチュンはツォカンの真上の部屋で、場所的にも一番良い所が選ばれており、三階建（gsum rtsegs khaṅ）の場合には二階にラブセーを設け、その真上の三階にシムチュンを設けている。建物が小さくて、シムチュンとラブセーが別々に設けられない場合には、併合され、経典は一部分下のツォカンに置かれる。またシムチュンがラブセーの隣に設けられることもある。このシムチュンはリンポチェの寝室であるとともに、訪問者との会見所でもある。したがって、来客用の座も設けられているが、リンポチェの座はそれよりもかなり高い所に位置している。又、リンポチェが高名な方で、来客の数の多いような場合—たとえばヘミスゴンパ(He mi dgoṅ pa）のような場合—このシムチュンの中に広間があり、通訳（英語）もいる。訪問者はカタ（kha btags）を挨拶代りにリンポチェに渡す。リンポチェは相手がラマ僧か、高い地位の人であれば、ツェムドゥー（tshe mdud）を相手の首に掛けてやる。これは一種の灌頂（dbaṅ bskur）である。ツェムドゥーにはチベットでは、黄色いツェムドゥーと赤いツェムドゥーとがあり、黄色の方は一般のラマ僧達に、赤は高僧に与えられるもののようである。我々はヘミスゴンパで、カタをもって来た軍人に赤のツェムドゥーを首に掛ける光景を眼の当にした。この場合、カタを訪問者の首に掛けてやる場合と、そうでない場合とがある。これはカタを相手に帰すか、帰さないかの違いだけである。また、一般にチャワン（phyag dbaṅ）といって、訪問者の頭をリンポチェ自身が両手でもって包む、一種の灌頂もある。顧問団員の酒井教授にはこれが授けられた。また、この堂内には、リンポチェ自身の守護尊（yi daṅ）を安置し、タンカや個人所蔵の典籍が多く置かれている。この典籍の多くは蔵外のものであり、我々にとって極めて興味深いものであったが、ほとんどのリンポチェが不在のため鍵が開かず（この鍵はリンポチェ個人が所持している）、内容を調査することが出来なかった。

5）ラブセー（図書館）

このラブセーにチベット大蔵経が完全に収められ、経蔵を意味する場合にはペズッカン（dpe mdsod khaṅ）とも呼ばれる。この部屋はラマ僧達の学問をする部屋である。室内には、パルカンがあり、その中にチベット大蔵経が納められている。このパルカンとパルカンの間に仏像を安置し、七器を供えて供養している。このパルカンは一番奥の壁際にピッタリと納められており、その前にラマ僧達の学問の場が設けられている。この部屋は日当りがよく、非常に明るい。

6）クンカラワ（僧坊）

クンカラワは長屋状になったもの、二階建になったもの、一軒建になっているもの等がある。このクンカラワの一つ一つの部屋をタシャク（grwa śag僧室）といい、この各

僧室には勤行が出来るように自身の字護尊を祭っている。また、クンカラワの一隅には早朝ラマ僧達の起床を知らせるトティン（rdo tiṅ石鐘）またはシンティン(siṅ tiṅ木鐘)があって、若いラマ僧が早朝にこれを打ち鳴らして、起床を知らせる。また、その片隅にはチベット独特の便所（gsaṅ spyod）があり、いずれも二階建の高所に縦20cm、横30cm程の四角い穴が開いており、隅に砂あるいは土が置いてある。使用後それを下に落すのである。

中庭にはタルシン（dar sin）という高い大きな幡が立っており、ツォカンの正面の一番上には、金色の法輪（chos khor）に二頭の鹿（ri dwaks）が向い合っているものが画かれ、その上にガンジル（gha njir）という幢があり、その両側にやや間隔を開けてツク（thug）という幢、その両側に同様にゲーツェン（rgyal mthan勝幢）が建てられている。以上がゴンパ内外の概観である。

〔二〕レーゴンパソマ（Gle dgon pa so ma）における経典の印刷

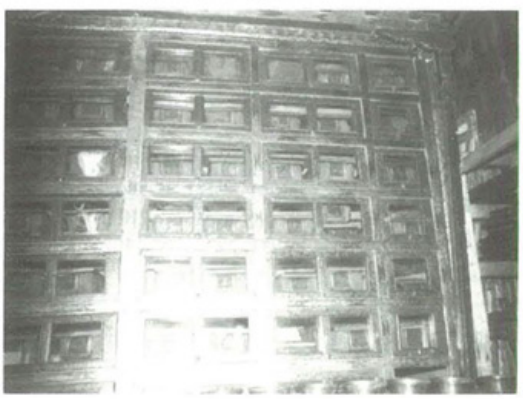
このゴンパはレーカル宮殿の直ぐ下にあり、三人のラマ僧が経を刷っていた。紙は日本請来のナルタン版のそれに似ている。墨は粉末状のもの（nag pye,dreg nag現地人はシェモーといっている）と膠（spyin）とを水で溶いたもの。刷毛（チャンパ）は羊の毛(lug bal)を使用し、三角の木に布を毛糸状によった羊の毛糸でぬいつけて張り、あとで面に出た糸を切って作る。墨は大きな石の中程を窪み状にした硯に入れ、刷毛で墨をつけて何度も石の上でこすって、墨のつき具合をみて、版木（par siṅ）に塗る。その上に紙（sog gu,bod śog）を置き、トゥブチェン（thub chen（というローラー状のもので刷る。まづ片面ばかり刷って、乾いた状態をみて裏面を刷る。刷っていた経（dpe cha）はMa帙の（lag na rdo rje）とBa帙の（kun bzaṅ）と（lṅa bsaṅs chuṅ ba）等であった。（写真参照）

〔三〕マトウゴンパ（Maṅ spro dgon pa）**のブンコル祭**（'bum'khor）

我々は偶然にもマトゥゴンパでこのブンコル祭にでくわした。この行事は夏に行なわれ、豊穣と息災を祈願するものである。ゴンパのラマ僧全員が参列し、4～5人が十万頌般若（'bum）を背にかつぎ、それぞれのラマ僧達が、タイコ（rṅa）、ハチ（sdub chal）、大小の笛

レーゴンパソマのパルカン（シン）

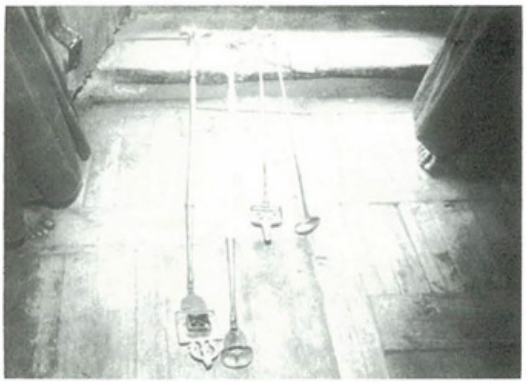
パルカンに納められた
ナルタン版のカンギュル



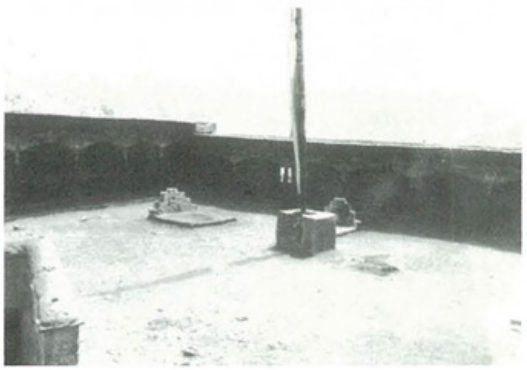
版を刷るラマ僧

ブンコル祭

護摩の大杓と小杓
左が増益の大、小杓。右が息災の大、小杓



護摩壇、左が増益、右が息災壇
中央の幡はタルシン



(duṅ chen, rgya gliṅ)仏像(sku 'dra)を持ち、先頭の若いラマ僧がチャルタル('phyar dar幡の一種)をもって、にぎやかに村のチョルテン(gchod rten)を回向してまわる。また、チョルテンでは御馳走を作り供養する。

〔四〕**リキルゴンパ**(klu 'khyil dgon pa)に於ける護摩壇と資具

このゴンパでは毎年2月に護摩(sbyin sreg)を修するとの事。我々が訪れた時には護摩壇は二基(息災と増益)しか残っていなかったが、毎年四種の護摩壇を設けて修するけれど、降伏(drag po)と敬愛(dbaṅ)の壇は取り壊すという事であった。壇の色と形と方位は我々の儀軌と同一である。また、ツォカンの中で二種(息災と増益)の大杓(dgaṅ gzar)と小杓(blugs gzar)とを見付けて写真に収めた。聞くところによると護摩に使用するものは、108支(yam siṅ)焼木、酥油(mar khu)ゴマ(ti la)焼香(gtul ba)米('dras)酪(sho zan)吉祥草(ku śa)白芥子(yuṅs dkar)ソワ(dso ba薬種の一種)麦(nas)豆子(sran ma)蕨麻(gro ma一種の草根)特殊なもの(khyad par rdsas)等であるとされているが、実際の護摩にはこれでは不充分であり、次の機会にこれらの調査をしなければならない。

今回調査から漏れた点は、次回の調査を待つこととして、以上四項目の報告をもって、ひとまず私の報告を終ることにする。

(高野山大学講師)

ラダック地方に見られる二種の壁画について

頼　富　本　宏

第1回高野山大学ラマ教文化調査団に筆者も同行の機会を得たので、その際に気付いた一、二の点を紹介しておきたい。

筆者は壁画を調査するグループに属したので、関心もその方面に限られる。壁画の中にはアルチ・ゴンパのマンダラなどのように特筆に値するものが多いが、それらは他の先生の紹介に譲るとして、それ以外のとくに注意をひいた二種の壁画について、現在までに理解し得た範囲内で報告することとする。

二種の壁画とは、すなわち、「八十四成就者伝図」(Grub thob brgyad cu rtsa bźi) と「生死輪廻図」(srid pa'i 'khor lo) である。本論の表題には「ラダック地方に見られる」という限定詞が付加されているが、両者とも必ずしもラダック地方に限定されるものではなく、ラマ教全体に認められるモチーフである。また後述するように、後者の場合はインドにその起原をもち、日本にも同系統の作品が見られるという。

まず「八十四成就者伝図」から紹介すると、成就者 (siddha) とはインド密教において、いろいろな仕方で完成、つまり悉地 (siddhi) を得た人々のことである。それらを84集めたのが「八十四成就者伝」である。もっとも、この中に登場する人々はすべてが歴史上の人物ではなく、多分に神話的要素の濃いものも含んでいる。その結果、八十四人の中には明らかに異名同人と考えられる例もあり、またこの伝以外にはまったく資料の認められない者も相当存在している。

しかしながら、それでもなお、=Saraha, Lūipa, Nāropa, Tilopa, Indrabhūti, Kṛṣṇācārya, Nāgārjuna, Āryadeva, Lakṣmīṅkarā, Jālandaripa, Dārikapa, Ḍombhīheruka, Śāntipa などの siddha 達には彼等に帰せられる著作も多数残されており、インドの密教、さらにはチベットの密教においても重要な役割を果していることは否定できない。

これらの成就者については、すでに A. Grünwedel,[1] G. Tucci,[2] D. L. Snellgrove,[3] P. C. Bagchi,[4] R. Sānkṛtyāyana[5] などによるいくつかの研究がなされている。

ところで、今回の調査において「八十四成就者伝図」として取り上げる壁画はヘミス・ゴンパのものである。ヘミス・ゴンパはラダックの首都というべきレー (gle) の南48kmに位置し、同地方の中でも最も重要なゴンパの一つである。宗派はカーギュパ (bka'rgyud) の一派のドウパ('brug pa) に属する。siddha 達は mahāmudrā(大印)の系譜と密接な関連を持っており、成就者伝の壁画がカーギュパの寺院に認められたのは決して偶然ではないだろう。

壁画の存在する場所はヘミス・ゴンパの本堂と言うべき主な建物の前の中庭の南側の壁で、そこに Vajradhara (rdo rje 'chaṅ) を中心に左右に二段もしくは三段に細長く描かれている。

描き方は、土壁の上にしっくいを塗り、その上に彩色を施したもので、大きさはだいたい長

さ、幅とも30cm～50cmくらい。各々の絵は木枠で仕切られており、原則としてそれぞれのsiddha達の名前が絵のどこかに記されているが、一部には後世の補修のためか、名前のないものもある。また逆に名前の掘り込みだけがあって絵の方が剝落してしまったものも認められた。

この壁画の成立年代について十分な確証は今回の調査では得られなかったが、Madanjet Singh の「Himalayan Art」では有力な施主である Tshe dbaṅ rnam rgyal（1533～75） の活躍年代つまり1555～75年に作られたと推測している。この人物ならびにヘミス寺院の創建年代については問題があるので、現在の段階では、この説を参考にあげるにとどめておきたい。

作品としては余り精巧ではなく、むしろ稚拙さが目立つが、各成就者の特色がよく捉えられていて（たとえば Saraha は矢、Mīnapa は魚など）興味深い。

なお、今回の調査で名前の判明したものを中心に、ヘミス・ゴンパの八十四成就者伝図を配列順に再現すると【表１】のようになる。

【表１】

A

name missing	ka ma ri pa	ki ra lo pa	a ni go pa	dā ri ka pa	illegible	ba bha hi pa	illegible
	45	73	81	77		39	

bha dra pa	a jo ki pa	bu su ku pa	name missing	ga nā li pa	u bhi li pa	ma ṅi pa
24	26	41		?	71	37

ku ma ri pa	ma ṇi bha ṭa mi (bha dra)	nor ma ka khva lu pa	me ko pa	ra ne pa	ku tsi pa	sa rva bha kṣa
63	65	?	43	?	35	75

B

mī na pa	tsau raṅ gi pa	śā nti pa	tsa ma ri pa	'phags klu sgrub	ā rya de va	ti lo pa	nā ro pa
8	10	12	14	16	18	22	20

rā hu la pa	dho ka ri pa	pa ṅka ja pa	ṅa ki pa	go ru ra pa	na gu ṇa pa	pa tsa ri pa	bhi kṣa ṇa pa
47	49	51	53	55	57	59	61

C

					ta nti pa		vī na pa
					13	rdo rje 'chaṅ	11

kha ḍga pa	dri bu pa	ko ṭa ra pa	go ra kṣa	ka ka li pa	name missing	lu yi pa
15	52	44	9	7	(2)	1

tsa lu ka pa	name missing	name missing	dha rma pa	ja la ndha ri pa	śa va ri pa	name missing	ḍombhi pa	sa ra ha
54			48	46	5	(3)	4	6

D

la ba pa	ka ka na pa	ka la pa	dhu khan pa	tsa ntra pa	śa li pa	tha ga na	nag po spyod pa
30	29	27	25	23	21	19	17

dha ru li	ka la pa (ki ra pa)	me kha li	name missing	dhi li pa	name missing	dsa yā nī pa	a tsi ka pa
70	73	66	(64)	62	(60)	58	56

E

to ga rtsi pa	illegible	na la na pa 40	name missing (38)	dha ma pa 36	ku ku ri pa 34	bha ndhe pa 32
	sa mu dra pa 83	ko ka li pa 80	name missing (78)	na ga bo dhi 76	sa ka ra pa 74	ka pā li 72

表の見方は、A段の右端から始まり、B段の右端に続き、したがってE段の左端が全体の最左端である。表中の番号は Tucci の研究資料(Ⅰ)、すなわち「八十四成就者伝」(Grub thob brgyad cu rtsa bźi'i lo rgyus) の成就者の順番号である。

それによって明らかなように、中央の Vajradhara を中心に左右にかなり規則的に配列されている。それゆえ、たとえ名前がなくても、あるいは絵が剝落していても、数列の関係からその個所の成就者名を推定することもあながち不可能ではない。

以上、一応中間発表の形で壁画を復元したが、今後は図像学等の方法を用いてさらに完全な表を作成したいと考えている。

次に生死輪廻図であるが、これは宗派を問わず、ほとんどすべての寺院の入口の所に四天王などと並んで描かれている。この種の絵に関しても、すでに L.A.Waddell, D.L.Snellgrove, Lama Govinda, さらには望月信亨、梅津次郎氏等の言及もあるが、それらの諸研究に、現地で見聞したこと、加えて日本在住のチベット僧 Tshul khrims skal bzaṅ 氏から教示を受けたことなどを総合して明確になった点を指摘しておきたい。

まず、この絵に直接関わりを持つ資料として「根本説一切有部毘奈耶」をあげることができる。重要な資料であるため、煩を恐れず該当個所を引用すると次のようである。

「爾時世尊告阿難陀、非一切時処常有大目乾連、如是之輩頗亦難得、是故我今勅諸苾芻、於寺門屋下画生死輪、時諸苾芻不知画法、世尊告曰、応随大小円作輪形処中安轂、次安五輻表五趣之相、当轂之下画捺洛迦、於其二辺画傍生餓鬼、次於其上可画人天、……中略……。中画仏像、於仏像前応画三種形、初作鴿形表多貪染、次作蛇形表多瞋恚、後作猪形表多愚癡……中略……。周円復画十二縁生生滅之相、所謂無明縁行乃至老死、無明支応作羅刹像、行支応作瓦輪像、識支応作獼猴像、名色支応作乗船人像、六処支応作六根像、触支応作男女相摩触像、受支応作男女受苦楽像、愛支応作女人抱男女像、取支応作丈夫持瓶取水像、有支応作大梵天像、生支応作女人誕孕像、老支応作男女衰老像、……中略……。

於其輪上応作無常大鬼蓬髪張口、長舒両臂抱生死輪、於鬼頭両畔書二伽他曰、汝当求出離　於仏教勤修　降伏生死軍　如象摧草舎　於此法律中　常為不放逸　能竭煩悩海　当尽苦辺際」

上記の引用文中の傍線を付した部分が、筆者が現地で得た木版刷りの生死輪廻図（図1）と一致する。

次に絵によりながら少し説明を加えると、まず大小の同心円輪を無常大鬼がしっかりとくわえ込んでいる。中央の小輪には、貪・瞋・痴の三毒を表わすニワトリ、蛇、豚(猪)が描かれている。次に大輪は五つに分けられ、そこに五趣の世界が描写されている。つまり人間は輪廻し

ている限り、この五趣の世界から脱れることはできないのである。

ここで質問が出るかも知れない。すなわちラダックを始め、あちこちで見られる生死輪廻図では五趣ではなく、六趣(六道)が描かれているではないかと。しかし、これについては問題はない。「大毘婆沙論」にも言われているように、他の部派では通常六趣を説くのに対し、有部等のある部派は五趣を説くために差異が生じたのであり、要するに伝承の相違にすぎないのである。

「根本説一切有部毘奈耶」と上引の生死輪廻図の決定的な近親関係を示すのは、図の左上方に説かれている偈頌二偈が、先に偈げた「根本説一切有部毘奈耶」中の偈頌と一致することである。紙面の都合等でチベット文の表記はここでは省略するが、インド仏教の初期の要素がそのままチベット周辺に残されている点は興味深い。

もっとも、外周にある十二因縁の絵解については、ラダックで見られたものと「根本説一切有部毘奈耶」のものとは必ずしも厳密には一致しない。ラダックで通常見られる十二因縁のモ

チーフは以下のようである。

1．無明　(avidyā)　　盲人の女性
2．行　(saṁskāra)　　つぼ作り
3．識　(vijñāna)　　果物を取る猿
4．名色　(nāmarūpa)　　舟の中の二人の男
5．六処　(ṣaḍāyatana)　　六つの窓を持った家
6．触　(sparśa)　　愛人達、接吻
7．受　(vedanā)　　眼に矢をつき刺れた男
8．愛　(tṛṣṇā)　　女性に伴われた酔者
9．取　(upādāna)　　果物を取る人（猿）
10．有　(bhava)　　妊婦、もしくは床の中の男女
11．生　(jāti)　　出産、もしくは妊婦
12．老死　(jarāmaraṇa)　　死体を背負った人

なお紙面の都合で詳しい絵の説明等については別の機会に譲るが、簡潔に言って、この生死輪廻図は寺院の入口に描いて、人々の悪業を少しでも滅して輪廻の絆から逃れることを教える絵解であったと考えることができる。

以上、簡単な報告にとどまったが、詳しい内容は密教学研究第10号を参照されたい。

（種智院大学助教授）

〈註　記〉

1）A. Grünwedel ：Die Geschichten der vierundachtzig Zaubeber, Baessler-Archiv, band V. pp137~228
2）G. Tucci ：Tibetan Painted Scrolls, vol. I, pp. 226~231
3）D. L. Snellgrove ： Buddhist Himālaya, pp. 296~297
4）P. C. Bagchi ： The Cult of the Buddhist siddhācāryas, The Cultural Heritage of India, Vol. Ⅳ, pp. 273~279
5）R. Sānkityāyana ： Recherches Bouddhiques, d'Origine du Vajrayana et les 84 Siddhas, J.A. Tome 225, pp.218~230
6）M. Singh ： Himalayan Art, p.95
7）L.A.Waddell ： The Buddhism of Tibet, Lamaism, pp.100~122
8）D.L.Snellgrove ： ibid., pp.12~18
9）Lama Govinda ： Foundations of Tibetan Mysticism, pp.234~257
10）梅津次郎：五趣生死輪図に就いて、「絵巻物叢考」所収
11）大正大蔵経第二十三巻　p.811a~b

〈付　記〉

本稿を著わすにあたって御助言をいただいた真鍋俊照、川崎信定、津田真一、石黒淳の各氏に厚く御礼申し上げる次第である。

アルチ村に滞在して

宮　寺　密　正

我々、田中・宮寺の２名は、アルチ寺院の壁画を写真撮影することを目的に７月11日朝出発した。途中、サスポールで２人（１人は35･6歳、もう１人は12･3歳）のラマをジープに乗せることになる。我々と言葉は通じず、手真似の会話が続いた。インダス河にかかる小さな吊り橋を渡り、しばらくすると索漠とした原野に崩れ落ちたチョルテンの群がいたる所に見え始めた。その昔、この地は大変栄えていたと想像せられる。やがて我々は緑におおわれたアルチ村に到着した。運転手とラマ達は知り合いらしく、運転手の好意で我々をラマの家に泊まれるように頼んでくれた。ラマは喜んで承知してくれた。僧房は１階が家畜小屋、２階に持仏堂、台所、便所、そして家族の集まる居間のような所がそろっており、そこにラマと彼の母の２人暮しであった。我々は３階の屋上部分にテントを張り、本拠地とした。しかし、僧房にはダニのような虫が多く、我々をいつも憂鬱にさせた。

７月12･3日の２日にわたり写真撮影をした。まず有名な第二堂より、三、四、五、一という順でまわる。それと同時に壁画の実測値及び寺院配置等も調べてまわった。ラマも好意的で堂の鍵を我々に預けてくれ、いつでも写真の撮れるように計らってくれた。また昼食は、ラマ達に御馳走になった。彼等は数人の村人と、他の僧房で朝９時より夕方５時頃まで経典の読誦を日課としていた。お茶とか昼食の世話は女達の役目であった。夕方になると、村人達が民家の庭先に集まって賑やかに夕食の宴を開いていた。

７月14日、朝より２人は別行動でそれぞれ村をまわって見ることにした。田中君は村の風景を写真に撮り、私の方はアルチ村のはずれにあるアルチラマリゾン寺院（リゾン寺院の末寺）へ行くことにした。前々日、アルチ寺院の近くで、この寺のラマ達のブンコル（息災祈願）の行列に会い、ここには17人程のラマがいると聞き、期待して行ったのだが、誰もおらず堂守の家族がいただけで、崩れかけたハカン１つしか見ることが出来なかった。

７月15日、ほんのわずかな滞在期間であったが、多くの思い出を胸にアルチ村を後にした。

毎朝６時頃、お世話になったラマが、勤行していたのを目にすることが出来たので、ここにゲール派の勤行内容を紹介しておきたい。

真言を唱えながら茶を置く、炉に灰を入れる。ギャラル（ポスカル）（香の１種）を炉に入れ、水等を準備する。

次　手を洗う。

次　坐し、茶を飲む。茶にマカニ（バターの様なもの）を入れる。

次　台の上に用具を準備する。

次　エルトルジョンの中へパニ（ペイ）（はった粉に似たもの）を入れ、水を入れる。

次　真言を唱えながらこねる。

次　マカニを手に塗り、スタンパにつける。

次　ザンスマングに水を入れる。

次　エルトルジョンにカムスンを置き、その上にムリパテッペを置き、その中に水を入れる。

次　真言（マーラマーラサンバラサンバラ……）を唱えながら、スタンパをつくる。

次　ティンシャクスをならす。（…―間…―間…―）

次　また作り始める。

次　ティンシャクスをならす。――①

次　出来たスタンパ22個程をムリパテェッペに入れる。次　またスタンパを作り、壺へ入れる。次　頭に帽子の様なものを着ける。

次　真言を唱え、念珠で数をくる。――②

次　①　次　ムリパテェッペのスタンパと水をエルトルジョンに流す。――③

次　ムリパテェッペにスタンパ10個を入れる。――④

次　①　次　③　次　④　次　①　次　スプーンでムリパテェッペに水をそそぐ。――⑤

次　①　次　②　次　④　次　弾指する。――⑥

次　①　次　③　次　⑤　次　④　次　①　次　③　次　真言を唱えながら、鏡に水を10回以上そそぐ。次　ムリパテェッペの水をスプーンで手のひらへ、そして飲み、また目を洗う。

次　ムリパテェッペに壺の水を入れる。次　右手に壺を持ち真言を唱えながら、左手弾指。

次　茶を飲む。　次　④　次　⑥

次　①　次　④　次　⑤　次　⑥　次　①　次　④　次　⑥　次　①　次　④　次　⑥　次　①　次　③　次　④　次　⑥　次　①　次　④　次　⑤　次　⑥　次　①　次　④　次　⑥　次　①　次　③　次　④　次　⑥　次　①　次　④　次　⑤　次　⑥　次　①　次　④　次　⑤　次　⑥　次　①（２度）　次　④　次　⑤　次　⑥　次　①　次　④　次　残りのスタンパ全部入れる。次　⑤　次　⑥　次　①

次　壺の残りの水で　ムリパテェッペを洗う。

次　茶を飲む。次　壺を布でふく。次　印（蓮花合掌にし、二空屈す）を結ぶ。次　拍掌（２度）次　①（２度）次　頭につけていたものをとる。次　真言を唱えながら、道具をかたづける。（珠数は常に左手にかけられる。）以上

朝　の　勤　行

塚　本　佳　道

7 月13日．私達３名（越智先生、小林隊員と私）は、早朝五時に起床してサンカル寺院（ゲールク派）に向けて出発した。早朝はまだ肌寒く、カッターの上に厚いセーターが一枚必要だった。空気が澄んでいるため実際は遠くにある山々がまるで目の前に映っているかのように近くに見え、雪渓がなんとも美しくまぶしくいぶし銀のように目に映った。ホテルの二階から見たサンカル寺院はすぐ近くに見えたが実際は距離があった。歩けども歩けども到着せず、勤行がもう始まっているのではないかと心配しながら息を切らして早足で行った。

サンカル寺院に着いてしばらくすると（６時ごろ）ホラ貝（ゴン）と共に起床の合図と思われる鐘の音（ドン・日本で使用される点鈴と同性質のものと思われる）が、気持よく聞えて来た。あちらこちらの僧房から僧侶がタオルと石鹸を手に持ち、水を汲むタンクを背負って川に行き、又ある僧侶はすぐ本堂にやってきて、仏器（チベットでは七器）の水を賛えたり、燈明をつける。そして小さな、５～６才と思われる小僧（チベットではこの年頃になると大抵の子供は寺に入り、得度の儀式を行ない、一生僧侶として寺で生活する。）が、大きなやかん（コックディル）を持って堂内に入り、炭をたいてお茶を沸すのだった。こうしてあわただしい勤行の前の準備が終る頃（６時25分）、寺で一番偉いリンポチェが来られ上座に座し、五鈷と五鈷鈴とそしてプルパ（お椀）を机の上に出す。手に珠数を持ち、何やら真言を唱え、印を結び、右手に五鈷、左手に五鈷鈴を打ち鳴らして、やっと私達が待ちにまっていた読経が始まったのである。

そうしているうちに、次から次へと僧侶が入口で三礼（本堂に向かって額と喉と胸に手を合わせ、足の膝を折り額を床に付けて両手をまっすぐ指をのばしてあお向けに差し出す。それを三回繰り返す。）をして座し、経具とプルパを机の上に出し唱和する。以上勤行に加わった僧侶の人数は全員で25人に及んだ。読経はあぐらを組んで、調子をとるかの如く、体を前後左右にゆすってリズミカルに唱えていたのが大変印象的であった。そうして約20分程して経の区切りがくると、先程沸かしていたお茶を小僧が上座から順番に汲んで回わって休息する。私達にもお茶（紅茶にバターを加えて少し塩からくしたもの）を汲んで持ってきてくれ、大変まるみがあっておいしかった。約２～３分でお茶を飲むと、リンポチェが経を出し職衆が続いて唱和する。その繰り返しでお茶はなんと七回程も回わってきた。高地に住むチベット人にとってお茶は欠かすことのできないもので、私達でさえ１日に７、８杯から10杯は飲んでいた。

読経の途中で、法具として使用される楽器が入る。それらは両手で持ってたたく太鼓（ンガ直経60センチ程）が３つ、オーボエのような音色をした笛（ゲリン、長さ約50センチ）２つ、経頭がたたく鉢（ロモ、私達の使用する鉢と全く同じもの、ただし鳴らし方が異なり、私達は水平に打つが、チベットでは普通上下に打つ。）一つと五鈷鈴を同時に鳴らすのである。

その他にチベットの楽器類では他の寺院に見られた大きな長いラッパ（ドウン・長さ約３メ

ートル、先の直経約三十センチ）や、小大鼓（手の平の大きさのもの）や、小さな鉢（ティンシャ）等があり、それらをいっせいに鳴らす。その音の荘厳さは、まるでオーケストラを聞いているかのような迫力があって、私達を悦楽の世界へと引き込んで行くようであった。サンカル寺院では６時30分に始まって１回（約２分間）、７時から７時５分の間に２回、７時30分に１回というふうに計４回にわたってこの音が経の途中に入った。

この様に時々はなやかな楽器をも加えながら最後に全員が手をたたいて唱えるのである。その様子は私達が使う弾指のようであった。勤行が終ったのが８時10分で、その間約１時間40分にも及ぶ長時間の儀式であった。その時に使用していた経典が（bIa maḥ rnal ḥbyor daṇ, yi dam khag gi bdag bskyed sogs shal ḥdon gces btus bshugs so ＝　ラマ僧の修習と自戒等の勤行選集）でゲールク派だけでなく広く他の派も使える経典集になっているようである。

勤行の後にその場で僧侶は朝食をする。お供えしてあったツオック(大麦粉をまるめたもの)を下げ、それをお茶につけながら無言のまま食べていた。これを最後に朝の儀礼が終る。

数日して私は、実際に勤行を共にしたいと考え、私自身チベット僧侶の服装（衣）を付け勤行に行った。しかし、意気込んでは行ったが、残念なことにちょうどその日は勤行はなかった。けれどもチベット僧侶達は大観迎をしてくれ、ていねいに衣の付け方を教えてくれ、また経典の読み方等もおそわった。ラマ教の世界にそれこそ飛び入りで入った私であったが、私が日本の僧侶であることを説明すると、大変関心を持って私達の仏教のことを聞き、また親切に作法を教えて下さったのが忘れられない。再度機会があれば今度は当分ラマ僧と共に生活し、さらに交流を深めたいと思う。

チベット難民キャンプ

佐　藤　元　宣

チョグラムサチベット難民キャンプは、ラダックの中でも最悪の地であった。村といえば緑があるはずなのに、荒野砂漠石ころだらけの地である。チョグラムサとは、まっすぐな道の土地という意味であるらしいが、視界をさえぎるものは何もない、褐色の世界であり、近くを流れるインダス河の水さえも褐色で、人々が生活をしているのが不思議なくらいである。

1959年、中国人民解放軍とチベット人との間に武力衝突、いわゆるチベット内乱が勃発し、ダライラマをはじめとして多くの避難民が周辺諸国に流れ込んだ。ここラダックに於いても、難民たちはキャンプを作ったが、上記のような地に住まざるを得なかったということが彼らの境遇を物語っている。

私たち二人は、かねてからの希望の民族調査ということで、食料を買い込み、なべかまテントを担いで、このキャンプにのりこんだ。ここには老人ホーム、ハンドクラフトセンター、子供村（孤児院）小・中学校、仏教哲学学校、病院などの公共施設があり、民家は少なく、あったとしても人影はまばらである。これはチベット本国に於いては、農業や牧畜で生活してい

た人々も、この地ではレーの街などに働きに出かけなければならぬからしい、民家が少ないのは、周辺部に点在していることを後になって知った。民家の側でテントを張り、人々と寝起きを共にしようと考えていた私たちは、仕方なくキャンプ内のたったひとつの食堂の庭先にテントを張ったのである。

二・三日間は、日本を発つ時から友好を持ちたいと思っていた仏教哲学学校に行ったのだがここは私たちが考えていたチベット仏教専門の学校ではなく、インド国立の広く仏教を学ぶためのものであり12～15・6才までの生徒たちに語学を中心に教育していた。彼らはほとんどがラダック人であり、チベット難民ではなく、難民キャンプとはほとんど関係がないのである。ここで私たちは、授業に出席したり図書館でラダック関係の本を調べ、先生方と話をした、校長のM・L・マットォー氏とは特に親しくなり、後日家に招待され、チベット語の本も頂だいした。

ここでチベット語とラダック語について書いてみよう、ラダック語はチベット語の一方言であるが、単語が全く違うものもあり、発音はラサ音とは異なる、ラサに行ったことのある僧侶には私たちのラサ音が通じたが、一般のラダック人の発音はちょっとわからない。またおもしろいのは、私たちがよく耳にした「こんにちは」というあいさつである。ラダック人は「ジュレー」という言葉を多用し、チベット人は「タシデレ」を使用していたようである。

四日目からは、小学校と子供村を訪れたのであるが、その関係がはっきりつかみきれなかった。子供たちの多くは、孤児か、両親が辺境地帯にいる寄宿生かである。彼らは小学校へ、年長者は州立の中学校へ、或いはレーの街の学校へ通う者もいる。また、小学校には家庭からの通学者もいるといったあり様で、いったい何人いるのかがわからなかったのである。私たちが訪れた時はちょうど子供村（孤児院・寄宿舎）の夕べのお祈りの時間であった。一日の日課を終えてホールに集まった子供たちのなかには疲れているのか、居眠りをしている子もいたが、一時間近くにわたってお祈りの声が続く。独特のうなるようなリズムがせまいホールにこもって一種異様な雰囲気でさえあった。一般的にチベットの読経は音楽的であると思う。

五日目は、ラダックにしてはめずらしく天候が悪く、風が吹き荒れ、砂塵がまいあがり、雨もぱらぱら落ちてきて、遠くの山々には雪が降っているかのようであった。この日も前日に続き小学校と子供村へ行く。こうして学校ばかり行っていると、民族班から学校班になってしまいそうだが、それは私たちのチベット語が未熟であったために、どうしても英語の話せる人、すなわち学校の先生と接触を取らざるを得なかったからである。

最後に私たちがお世話になった食堂の人々のことを書いておこう。主人はトゥプテン・テンジン、寅年生れの39才、チベットにいた頃は軍隊に所属していたという。妻はソナム・パルモ、戌年生れの19才、長女がツュリン・ヤンチェン、丑年生れの４才、長男がソナム・ワンチュク辰年生れの２才である。名がすべて違うので聞きかえすと、家族名はアジックだと教えてくれた。また、婦人の年齢がどうもおかしく思えてしょうがなかったが、上記のようにチベットにも十二支があり、動物も順序も全く日本と同じなので、それを聞けば正確な年齢がわかるのである。あるいは31才であろうか、いやどう見てもそうは思えなかった。さてこの家族はこうし

て食堂を経営することができる程富裕であり、この地にはめずらしく牛を３頭も飼っていた。しかし飼料には困っていたようであり、私たちの捨てる紙くずまで牛に食わせていた。私たちとは言葉も通じないのに、いろいろと気のつくよい人たちであった。

六日間の短い滞在を終え、不要になった装備を子供村に寄付して、私たちはチョグラムサを後にしたのである。……今も目をつむれば、アマラ（おかあちゃん）の顔がうかんでくる

アマラ～　オマ……

学生班のこと

常　多　昇

四月の初め、松長先生のお宅で、ラダック調査隊の話が決まった時、私達にはもうあまり時間が残されていなかった。６月末の出発まで、僅か二ヶ月半、隊員の選定と、具体的な計画書作り、そして出発までの諸準備と数えあげると、少しの猶予も許されない。ただ、実現しなかったとはいえ、昨年度学生だけの計画が立てられ、情報収集と一通りの手順は了解していたので、そのプランをもとに新しい計画が練り直された。第１には、先生方のチームと学生のチームとに分け、それぞれが相互補完的なものとして、つまり専門の先生方には調査地での実際の指導、学的判断を、若い学生は、それまでのあらゆる雑用一切と、写真、記録などのアシスタントとして、機能、責任分担をすること。第２には、初めての調査であるから、できるだけ広範囲に、要領のよく、無理のない日程を組むこと。そして第３には、費用は自弁とすること等が骨子となった。

私とＴ君は早速、学生チームの編成にかかった。臑かじりの学生にとっては、費用の点も大きな問題だが、まずはいかによいスタッフを集め得るかが先決だった。学生隊員として要求される点は、まず強靱な精神と体力、そして情熱と責任感、それにある程度の任務分担の能力が考慮される。集まったのは院生が２人と学部の学生４人、今までにお互いを知らない同士もある。チームワーク作りと予備知識の習得を兼ねて、勉強会を設けることになった。言葉、歴史、地理、そしてチベット仏教について、短期間に一通りの勉強をしておかなければならないし、参加したメンバーが、何を見て、何をしたいのか、といったテーマでも討論した。そして各自が各々の役割を引受けて、出発前の山のような仕事をこなしていかなければならない。二ヶ月程の期間はあっという間に過ぎていった。

先生方のチームはチベット学の権威者とインド通のかたがたで編成された。それに対して学生班は海外経験者は二人だけ、出発前に多少の不安はあったが、日本を出て三日目、スリナガルに着いた頃にはもう全員が、持前の闊達さをとりもどしていた。僅か一日の間に装備の買付け、車の手配など、協力して済ませてしまうと、予定より一日早くスリナガルを出発した。

外国へ来て、言語、習慣、顔立ちも違う人々のなかに立ち混ざると、私達は、一種独特の立場に立たされてしまう。言葉が通じないということだけではない。異なった民族と日ごろつき会う習慣が、私達にはないからである。それが一人の旅行ならば、無理やりにでもつき会わさ

れてしまうのだが、日本人ばかりの団体でいたりすると、自分達の小世界を形成して、それで良しとしてしまいがちである。現地調査というものが、より客観性を持つためには、一度相手の立場にも踏みこむことが必要になってくる。日本を出て5日目にはラダックに着いていた私達は、むしろぶっつけ本番の形で寺院調査にとりかかった。

私達は日本での勉強会の中でチベット語も練習して来た。短期間にはとてもマスターできないから、簡単な会話手帖を作って、現地での習得に期待した。それを片手に坊さんに質問する。「あなたのお名前は何といわれる。」「はい、私の名前は……。」大学でギャッオ先生に習ったとはいえ、初めて会ったチベット人に通じたことで、私達は意気ごんだ。各自が勝手に質問を浴びせると、時には「ハコ、マソン」と言われてしまう。おお、相手が「解らん」と言うのが解る。

一日の調査が終わると、宿舎でその日の反省と解説を受ける。今日、見て来たばかりだから、説明を聞いてもよく解る。また力も入る。時には学生からも「こう言うてました。」と紹介する。

間違いはその場で指摘され、情報は深められる。夕食の後、翌日の行動を再確認すると、もうぐったりとして床に着く。電気の消える前の寸暇を惜しんで、勉強をしたり学生同士の討論をしたりもする。ラダックでの毎日は目まぐるしく過ぎて行く。

前半の日程が終わり、松長先生以下半数が帰国してしまうと、私達学生班と指導にあたってくださる越智先生とがとり残された。今度はやり方を変えて、二人づつの組が別々の場所で行動をすることになる。各々がその個性に応じて、より深く現地を体験せんがためだ。壁画撮影のアルチ班、生活調査のチョグラムサー班、寺院調査継続のレー本部班と、目的も明確にされた。僅か一週間程の分散調査だったが、皆それぞれが別の体験を経て、逞しくなって帰って来た。久しぶりの顔合せで話もはずみ、自分なりのラダック像を生き生きと語りあった。

スリナガルで現地解散の後、学生隊員はおもいおもいの方向へ散って行った。その内容はこの報告書には盛られないが、各自の「ラダック」と共に貴重な思い出となった。

カシミールの山へトレッキングをした者、ダラムサーラのチベット府を訪れた者、ネパールやベナレスの仏跡を見た者、九月に再会した私達は、またそんな話に時を過ごした。そしてラダックでの体験がより大きな枠組の中で、もう一度確認できたのである。

最後に、帰国後の反省会で語られた、今後への課題を述べておきたい。第1には専門のスタッフの充実である。写真、録音など、分担を決めてそれなりに仕事をしたのだが、一人で何役も兼ねなくてはならなかったのと、まだまだ技術や場数を踏まなくては良い成果が期待できないということ。そして逆に各々のスタッフが何役もこなせるだけの才量を持つ必要性も実感された。第2には歴史、風俗、習慣等の予備知識と、最低限の語学をマスターしておきたいこと。ただ単に現地事情に詳しいぐらいでなく、もう少し幅広い知識と経験を積んでおきたい。第3には、チーム編成を工夫して、お互いが足を引っ張ることもなく、機動性をフルに発揮できるようにすること。今回はむしろうまくいった方だが、人間関係、各人の興味など今後も考慮すべきだろう。第4には方法論の確立である。フィールドワーク、情報整理等、出発前にKJ法の手ほどきを受けたり、現地での各自の工夫はあったが、今後益々この方面の知識と方法が重

要となろう。そして私達が唯一誇れるのは、厚かましいといって良いくらいのタフネスとバイタリティーであろう。忙しい日程の中で時には口論もし、体調を崩すこともあったが、とにかく何とかうまくやれたのは、この情熱とチームワークのおかげである。

写真担当として

田　中　博　之

はじめて、海を渡り、気がつくとそこは、ただただ広大な大陸であった。写真撮影を担当した私は、インドという大陸、山また山に囲まれた、ラダックという地方を、ファインダーを通してしか見ていなかったという気がする。

調査に当たり装備としては、十分すぎるほどのものを持って行った。

カメラ2台、レンズ3本（20㎜・35㎜・ 200㎜）・ストロボ2台・三脚・露出計・接写リング・フィルター各種など・それを、車に乗った時の振動を吸収するために、全体にスポンジを敷きつめたカメラバックに収めて……また、フィルムは、カラースライド50本カラープリント10本、白黒フィルム 100本を持って行った。

以下に、フィルム・写真器材の使用用途、並びに、各々の使用結果の反省点を述べて行こうと思う。

まず第1に、フィルムの使用用途である、この調査旅行の目的と対照し、最重要ポイントと思われるところの各ゴンパ内部の壁画についての撮影には、全てカラースライドフィルムを使用した。これは、調査終了後の各種・報告会・展示会などに於ての発表に便利であり、また拡大して見る事により、細部まで明確にすることが出来ると考えたからである。

次に、カラープリントは、あくまでも、サブ的用途として使用したにすぎない。したがって、これは、宮寺隊員と私が、重点調査として、アルチ・ゴンパに5日間滞在した時に使用した。

白黒フィルムは、フィルム数にかなり余裕を持って行ったため、主に、上記カラースライドの使用目的以外の事・つまり、ラダックの各地の風景、スナップ・人物・風土などの撮影に使用した。

この様に、フィルムの使用目的を明確に分けてしまった事が、結果として、その後の整理の段階で、支障をきたしてしまった。と言うのは、整理が、カラー・白黒共に、かたよりすぎてしまったと言う事である。やはり、第1回の調査なのだから、各フィルム共に、全般的に撮影するという事が、今くやまれてならない。

これは撮影を担当するものの力量にも、かかってくる事だが……

第2に、写真装備についてであるが、カメラ2台、レンズ3本というのは、妥当であると思う。私は、1台に白黒フィルム、もう1台にカラーフィルムを入れて使用した。また、ストロボを2台使用したのは、成功であったと思う。撮影をする被写体が、壁画という性質上、1灯のみでは、どうしても、光が当る中心付近が反射により色が飛んでしまう。これを、2灯を用いて、各々、被写体に向かって45度の角度から光を当てると、全く反射のない、クリアーな撮

影が出来た。

この様に、２灯を使用する場合、ガイド・ナンバーは、１灯の場合のルート２倍になる事を、注意する必要がある。

ゴンパ内は、どこでも電灯がなく暗いためピント合わせには、トーチランプを被写体に当てて行なった。この時、マグニファイアー（ピントグラス拡大レンズ）を使用したのはよかったと思う。

その他、接写リング・クローズアップレンズ・偏光フィルター・露出計を持って行ったのであるが、いずれも使用回数は、全日程を通じて、１～２回ぐらいであり、これらは、別段心要はないものと思われる。

さて、以上の様な考えを持って撮影を行ない、重大なミスも犯す事なく目的を達成できたのは幸いであった。しかし、問題がない訳ではない。

私は、全くというほど仏教芸術に関する知識がないが、撮影の一応の技術を持っていると言う事で、この調査団に同行させてもらったのである。だから、いざ各ゴンパ内の、色々の被写体に向った時も、この被写体のどこが１番重要なのか、どの様に表現すればよいのかが全くわからず、ただ先生方の言われるままにシャッターを切っていたと言うのが正直な所である。今、整理された数千枚にものぼるプリントを手にしてみると、どうも個々の作品が散漫である様な気がしてならない。

以上の様に、思い返せば反省点ばかりである。しかし、あの、インド大陸のスケールの大きさ、壁画の美しさは忘れることが出来ない。

機会があれば、再びラダックを訪れて、もう一度、今度はより以上の主体性をもって被写体に望みたいと思う。

ラダック行の医薬担当報告

西　谷　　正

１．慌しい出発前の準備にて、充分な情報検索もないままに、あらゆる状態を想定して広く浅く薬品を網羅し詰めこんで出発した。極度の乾燥地でしかも標高3500ｍ以上の特殊な気象条件での隊員のコンディションが如何なるものになるか、実際に行ってみないと浅学非才な私には理解できない面が多いと考えたからである．実際には使用しなかった薬品がほとんどであったが緊急の場合にはある程度役立ち、なおかつ副作用の無い薬品を選択したつもりであったが、その場で欲しい薬品が欠けていたりした。下記にリスト及び大略を述べさせて頂く。

２．携行薬品リスト

用　　途	使用した薬品及び器材	使用しなかった薬品及び器材 次回は取捨選択すべきもの	次回は携行すべきと思われる薬品
強　心　剤	六神丸、クラテグット錠	ビタカンファー注	六神丸は分色品とす

降圧利尿剤		ダイクロトライドS	
抗生物質	ジョサマイシン	合成ペニシリンアモリン ミノマイシン クロロマイセチン アクロマイシン コサテトラシン	
サルファ剤		スルキシン	
抗菌剤	ウイントマイロン		
鎮静剤	ネルボン、コントール 仁丹、梅仁丹		
酔止・抗ヒ剤	トラベルミン ドライブソフト	ハイライン、アレルギール錠	
鎮痛剤	グランドール、 セダール	サリドン、セデス	
消炎鎮痛剤	エポブロン	ノンフラミン、タンデリール	
感冒薬	アルペンカプセル トローチ、ベンザ鼻炎 カプセル		顆粒非ピリン系 感冒薬、ヴィク スドロップ
鎮咳薬	プレコール咳止め	カルダンカプセル、六括錠	
胃腸薬	新キャベジン顆粒 三共肝臓胃腸薬分色	ブスコパン錠、ブスコパン注	消化酵素
下痢止	ワカ末F錠　正露丸	ペクリンネオ	
緩下剤	快腹丸	チルゴン	
ビタミン剤	アリナミンA25 トリメートE		総合ビタミン剤
目薬		アイコール、ミユリン	ハイマイティア
外用消毒	マキロン	イソプロパノール、希ヨーチン	
日焼止め	カラミンローション	日焼止クリーム	
皮膚軟膏	アレルギンP、ケミセチンデキサ、リップクリーム	クロマイン2%、トラゾロン、クロマイN、オイラックスS ニベア、フロラルミン、ピロエース	
外用シップ剤		三共シップ、サロンシップ	
防虫剤	モスパーゾル モスパローション		
殺虫剤	バルサンくん煙剤	のみ取粉	
衛生材料及び器械	カット絆③サイズ サトーバンフリーサイズ 血圧計アポロ、体温計 救急箱	バンソウコウ、ガーゼ、ホータイLL、L、M、S、ハサミ ピンセット、カット綿、注射筒及び針、浣腸	
漢方エキス	黄連解毒湯、八味地黄湯、三黄瀉心湯、防風通聖散、葛根湯、甘草湯	茵蔯蒿湯、猪苓湯、桂枝茯苓丸、五苓散、小青竜湯、大紫胡湯、補中益気湯、乙字湯	小建中湯 桂枝加芍薬湯

☆以上の他、各自個人的に特殊薬品を持参したものは記述しなかったが、一部個人より借用したものは載せて置いた。

☆ビタミン剤、感冒薬、鎮痛剤、救急絆くらいの対照療法的に使用できる薬は、各自小分けセットにして携帯しておくもの便利であろう。

3．食生活の激変に対処して次の処方を１包として１日１～２回、17日間サンプル的に広安先生と私が服用してみたが外地での主として消化器疾病の予防にある程度効果があったと思う（アミノ酸製剤１錠　酵母剤５錠　グロスミンクロレラ３錠　有胞子性乳酸菌製剤３錠）

4．レーの町は高山病と呼ばれる程の高所にはないにしても、酸素不足の代償作用の結果スリナガルで測定した血圧よりも５名の隊員が平均10～20㎜Hgの上昇、並びに脈拍数平均10拍の増加をみた。

酸素分圧の減少による呼吸循環系の障害、いわゆる高山病は大なり小なり全隊員が経験した。疲労の度合、下痢などの併発により差はあるが頭痛、嘔吐感、食欲不振、息苦しさがあり、傷寒論の太陽病様の症状がこれに伴うことを私自身も経験した次第である。安静、休養をとり疲労回復と高度順化を待つのみであるが一般感冒薬、鎮痛剤などもある程度効を奏するが、葛根湯エキスとエポブロンの併用で高山病様疾状が軽く過ごせたのは発見であったろう。

5．滞在中の隊員からの主訴　７月１日～７月８日

下痢、腹張、腹痛、頭痛、頭重、不眠、食欲不振、微熱、倦怠感、嘔吐感、胃痛、鼻炎、便秘、皮ふ炎（日光皮ふ炎含む）鼻出血（以上頻度順）

6．ラダック地方の平均寿命は72才（ディーン氏による）であるから秘境であっても人間の生存圏としては条件が良い方であろうと思う。この季節を選び衛生、飲食に注意すれば一般海外旅行並の準備でも充分であろう。

以上、はなはだ粗略な報告となったが、今後の参考になれば幸甚です。

（薬剤師・臨床検査技師）

チベット旅行雑感

庄　司　荘　一

私はチベット仏教の専門家のお伴をして、はじめてインドに渡った。

チベットとは申せ、中国のいわゆる西蔵ではなくて、インドそのものであることがわかった。

高野山では、リンポチェ（活仏）師から中国の宗教対策についてうかがっていた。私は職業柄（一中国学者）、今度の視察旅行は中国側からならぬ、インド側つまり裏側からの中国観察ができるかも知れないと期待したりしていた。しかし、結果は中国・インド国境の壁は厚くて単独行（せめて、カラコルム峠からラサに通じる道路なりと一目みようとする願い）すら封じられて引返した。

インド政府はレー市の郊外にチベタン部落を建てて、ダライ・ラマとともに逃避してきたチベット人を保護していた。その数は数千ときいた。もっとも、レー市郊外に留まった者は数百にすぎないそうであるが。ラサを中心とする中国からの避難者たちの家を三軒ほど訪れた。何かしら中国の情報がほしいからであった。しかし、彼らは夢中で田畑をほうり出してラマ僧の

一行に従ったのだと言った。簡素な家の一段高い棚に飾ったダライ・ラマの写真を指さして、彼らは大きくうなづく。信仰の力である。フト、中国の民家で大概の家で毛沢東の写真を飾ってあると聞いたのを思い出した。問題は複雑だ。

最近、大阪で平山郁夫画伯のチベット素描展をみた。これは、堂々と正門玄関を通ってのラサ行きであった。われわれが訪れるとしたら、ポダラ宮と大昭寺をまず目ざすだろう。チベット学者の皆さんに詳しくうかがったわけではないが、いつの日か必ず、東廻りでラサから小チベット（レー市）入りも可、小チベットからラサ入りも可という時代がくるであろう。四川省にはチベット大蔵経の漢訳経典が秘蔵されている寺があるとは、台湾大学の楊家駱教授から伺ったことである。

陶淵明の桃源に比べては程遠いとしても、人口一万たらずのレーの街の大人も子供も素朴そのものに思えた。特に子供はすばらしい。

アルチコンパ（寺院）の調査に加わった一日の午後、学者たちは午前の調査をより精密にすべく、再び、うす薄いゴンパに突入していった。昼食はゴンパから15メートルほど離れた草原でとったのであるが、その際、子供たちが群れて我々はいささか閉口した。パンなど与えて、討論の邪魔をさせぬべく一線を画した。子供たちは我々を遠巻きにしてざわめいていた。研究者たちは大概の身廻り品を居場所に置いたまま出動して、私とくたびれた人たちが残っていた。突然、少女をまじえた10人あまりの子供たちが、こちらに向って、それこそ殺到してきた。その喚声にギクッとした。彼らの指さす方角をみると、休憩場所の上手から水がひたひたと我々のところに押し寄せてくる。子供らは忽ち我々の荷物をかかえて四方に散る。間一髪といってよかった。荷物を回収して、改めて、この子らをみつめたのであった。

M・ディーンさんを単独で訪問したとき、きき方がまずくて、路上の大人はインド人で別のディーンさんのところに引張っていった。物珍しさもあったであろうが、茶果の饗応を受けたさあ、引きあげるとき、ホテルの息子（12歳）をはじめ、近所の子供4～5人が列を組んで案内に走った。途中で息がきれ、ひと休みすることにして、チョコレートの一片ずつを配った。その折、彼らが歌ってくれた民謡がテープにとってある。東北を仰げば、七千メートルの崑崙（カラコルム）山脈が白い屋根をなして続いていた。より近くの連峰をおおうように空のかなたに消えていた。子供たちがいちいち指さして叫んだ峰の名は忘れてしまった。口ぐちにした幼いダミ声だけがすぐそばに聞える。

帰路、一日をデリーですごした。国立博物館での四時間は、中国の歴史・文明にばかり目を注いでいた自分を、何とお前は迂闊だったのだと、一喝させるのに、じゅうぶんだった。
たしか24室に分けて、古代からのインドの歴史に即した遺物が陳列されていたと思う。その3室だけを廻って、ここにもう一つの東洋が屹立していることを思い知らされた。いや、それは大いに違う。まだ自覚はその門の前に突立っている程度だ。お前は開発途上国とは別な意味でインド人が現代文明に大きく発言して、現在、ないし将来へと続く混迷に寄与する地力を持っているといいたいのだろう。底の浅い国とは異なった、真底から現代文明を批判する人間の知恵がインドには混純の中に潜んでいるといいたいのだろう。まずはその辺である。

大学当局はもとより、多くの方に助けられて無事帰ることができた。有難いことだと思っている。

（高野山大学教授）

ラダック点描

広安俊道

カシミールからラダックへ

スリナガルを出発し、かなり北上しても青々とした水田が広がっている。樹木も、作物も豊かである。アカシヤ、ヤナギ、アンズ、ウメ、ザクロが繁り、畑にはネギ、トマト、キャベツ、トウモロコシ、スイカ、エダ豆、サヽゲが植えられている。路傍にはレンゲ、アザミ、クローバ、野イバラ、ハギ等が目にとまる。途中の集落ゾジラ、カンガンの店先には果物類が豊富に盛り上げてある。

ヘギ板で屋根を葺いたカシミール風の人家が姿を消し、豊かな実りと緑が、杉木立から松に、さらには這松に変り、やがてテント張りの関門バルタルの岩山には3、4軒のチベット風の土の家が見えてくる。車は真黒な排気ガスを吐き、四囲の静けさをゆるがす爆音と共にあえぎ、あえぎ断崖絶壁のゾジラ峠（3531メートル）を越す。インドの風物はすべて視界から姿を消す。この峠が驚く程確然と、稲と麦とを分けている。

自然はこゝで一変しているのである。中継地カルギルはすでに灰色の街である。水も土地も、家も、そして人々の身成にも、艶やかな色はない。耐えて生きねばならぬ自然が何の容赦もなく迫ってくるのである。エンジンを酷使し、絶え間なく揺れ続け、ナミカラ峠（3690メートル）ファトラ（4100メートル）を越える頃には、荒涼とした世界に時折薄くまばらな緑の集落と人影があり、緩やかな谷の底に、むしり取る程の青草を求めて移り往く遊牧民の姿を見かける。

死と共に生きる世界

山々は遠く近く、まるで生きもののように、不要なものはすべて振い落とすかのように、嵐と雪は、岩を払い、土を振い、谷へ谷へと休むことなくその動きを止める気配もない。ある処は大小無数の岩の原野となり、あるところは途方もない扇状台地となって谷を埋め尽している。その微細な土を嵐は谷へ運び、河岸段丘の絶壁から流れに投げ込むであろう。川は岩を呑み、土を溶かして瀑流と化している。

インダスはその源流において厳しい自然の暴威を恣にしている。ガンジスは青々とした母なる大河なら、インダスは、その色を灰に朱に変幻する父なる大河というべきであろうか。

一行は驚くべき広がりをもった扇状台地をレーの街へ急いでいる。遙か彼方の山並に消える。細々とした1本のアスファルトの道を2日間の酷使に、息絶えるかもしれぬ不安をかき立てながら文明の力にすがっているのである。この草も木もない大地に生きようとする時、人はたゞ先人の通って往った細々とした道を、水と緑のある集落へ急ぐ外に術はない。それは30度を越

す熱砂の道であり、砂嵐に眼を覆う狂気の砂漠であり、停れば死を誘う酷寒の道である。

その厳しい自然が育んだものは、また外の世界に順応するに困難であるともいう。その昔チベットからインドやビルマに求法した修道者は僅かしか生きて帰らなかったと伝えている。また、ラダックの高原を首と尾に白い輪をつけ、音色少なく貴婦人のようなカササギに似た黒い鳥ガタンプティーが、ゾジラ峠を南に越えるならば、死が待っていると聞くとき、俄仕立ての入域者の胸をしめつけ、心臓を高鳴らせ、深い息に支えられなければならぬ自然の恐ろしさが実感出来るのである。

夢幻の如き静寂と念怒の諸尊

吹きつける砂塵におびえるように、色あせたアザミが、ポツンポツンと大地にしがみついているのみで、緑のない砂原に、遠い雪峰の伏流水が忽然と湧き出るところにヤナギ、ポプラ、ラルチャンや、時にはウメの葉影の揺れるオアシスがある。人はそこに住み、土と石の家を造り、牛や羊を囲い込む。簡易ホテル—カラコルム—の北窓から、人家の周りにある麦と野菜の畑、その向うに岩肌をむき出しにした不毛の台地、その尽きるところに薄茶色の岩山、それを越えて連らなる白雪の連峰、そこから煙り立つ白雲を、掻き消すような深い青い空を眺めるとき、厳しい自然に生きたチベット人の詩句

死の主は誰とも交わらない　忽然とやってくる　明日までといって待ってはくれない……
死の主は無慈悲である……殺害者に面前しているかの如く……（中村元著チベット人の思惟方法）

を思い浮べるのである。

電灯のない、うす暗い数々のゴンパの中で、明り窓からもれる、ほんのりした光や、やっと光のとゞく懐中電灯に照し出される諸尊の像が、決して平らではないが、滑らかなゴンパの土壁に余すところなく描き尽くされている。　そこは静寂そのもの、仏・菩薩の像と共に、妥協を許さぬ念怒の諸尊が展開している。静けさと、猛威の誠に対象的な雰囲気を醸し出している。それは人間の赤裸々な欲望から飛躍的に静けさの世界への昇華が、巧に演出されているように思えてならない。

殊に抱交のヤブ（父性）ユム（母性）の尊像は両性をもって表現したインドやネパールのミトナの像に比べるならば、インドのおおらかさでもなく、ネパールの陰湿さでもない。実にダイナミックにして峻烈とも清冽とも名状し難い迫力をもって浮び上ってくる。それらは経軌の定めや、神の画家としての絵師達の、卓越した技量もさることながら、暴威の自然に耐えて生きる人々の死と闘う生のほとばしりとも思えるのである。三身に満たされることなく、現身を問わずにはいられなかった人々の情念の発露にも思えてくるのである。

外は塵りにまみれた、うすく色あせた世界があるばかりなのに、うす暗いゴンパの中の優れて鮮かな色のコントラストは、まるで夢幻の世界なのであった。

ラダックのラマ教寺院を訪ねて

天　野　宏　英

今夏、はからずもラダックのレー地方に点在するラマ教寺院を数ヶ寺訪ねる機会にめぐまれた。

ラマ教やラマ教の寺院については本を通じて僅かながら知識をもち、また寺院の外観などは写真によってすでに何度もお目にかかってはいた。しかしあの峨々たる岩山の上にそびえたつ僧院を眼の当にした時には、ある種の違和感とともに、言いようのない感動におそわれた。

これが、厳しい戒律を持し、瞑想と儀式にあけくれする出家僧の依所であるか！

俗塵を超出してそびえたつ僧院、廃墟のごとく人気のない殺風景な僧院、木と泥でつくられた、昼なお暗い僧院、その中は、三方或は四方が諸仏・菩薩の壁画でかこまれ、中央のやゝ奥まった所にいますご本尊の前には読経する諸僧のすわる2列のイスがある。

これすべて出家僧のためのもの！在家の信者の入りこむ余地はない。解りきった話？　在家の信者は、僧院の入り口の左右の壁に画かれた六道輪廻の図をみて、もっぱら生天ための功徳をつむのみとか!?

仏陀の時代から仏教の主流は出家仏教、寺院は出家僧・尼のためのものとみなされてきたが、ここラダックにおいてはじめて、その実物をみせつけられたようなショックを感じた。最初に違和感をもったのは、このせいだと気づく。在家仏教が主流を占めている日本では、恐らく山奥の禅寺にでも行かなければお目にかかれないだろう。

そしてもう1つの異和感は、ラマ教では私―結婚し子供をもち在俗の生活を営んでいる―は救われないということ。ラマ教では仏になることのできるのは出家僧のみ、俗人は仏になることをあきらめて、だゝ生天を願うのみ！仏教は出家僧のためのものか？……そうだ！とここラダックの、俗界を睥睨している僧院はいいはなっているようにみえる。

しかし、この姿勢は何時までもちこたえられるだろうか。すでにチベット本国はコミュニズムの洗礼をうけて、僧は還俗を強いられ、僧院は博物館化してゆくという。そしてまた、ここラダック地方にもすでに俗人をまともに相手とするキリスト教やイスラム教が浸透してきている。このような状況下において、将来にわたっていつまでもチベット人の在家の信者は、僧院を護持しつづけるであろうか。また仏になれない在俗の信者は、僧院が破壊された後にもなお仏教徒という意識をもちつづけるであろうか。かつてインドにおいて、イスラム教徒による僧院の破壊と僧尼の殺りく・追放の後、仏教の姿があとかたもなく消滅していったようなことにはならないであろうか。

ヘミス僧院のヘッドラマの、大乗仏教発展のための仏教徒の連帯の必要性を説くことばを聞きながら、なんとももの悲しい気分におそわれたのは私1人であっただろうか。

（比治山女子大教授）

寺院諸堂内の仏像・壁画について

小　林　暢　善

1　ヘミスゴンパ（カギュ派）

ツォカン（図１）

①釈迦牟尼（金色、転法輪印）、②③④⑤⑥いずれも仏像であるが記録なし。Ⓐはチョルテン、以下□と略す。Ⓑはラブセー、斜線を付記する。Ⓒはリンポチェの座、□と略す。Ⓓは職衆の座、また①②③…は仏像、㋑㋺㋩…は壁画を示す。

ツォカン前庭（僧房と中庭）（図２）

㋑の壁に84成就者の壁画あり、⊕は幡の位置を示す。

2　スタクナゴンパ（カギュ派）

ツォカン（図３）

①文殊菩薩像、②グルリンポチェ、③⑤ナウワンギャルチャン、④ナウワンナンギャル、⑥⑦⑧いずれも釈迦牟尼像（全て金色、順に智印、触地印、転法輪印）。㋑マハーカーラ像、㋺触地印の釈迦牟尼等中国風の壁画㋩中央にドルマと㋺の続き、㋥祖師像、㋭グルリンポチェ、共に続き。

図１　ヘミス・ツォカン

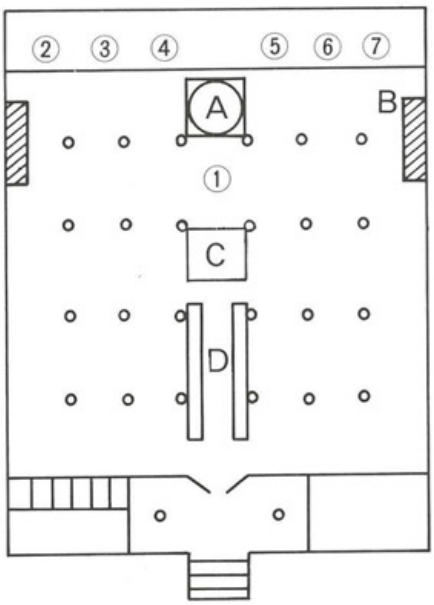


図２　ヘミス・ツォカン前庭

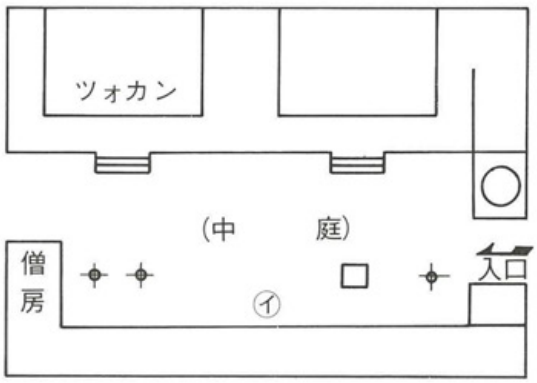
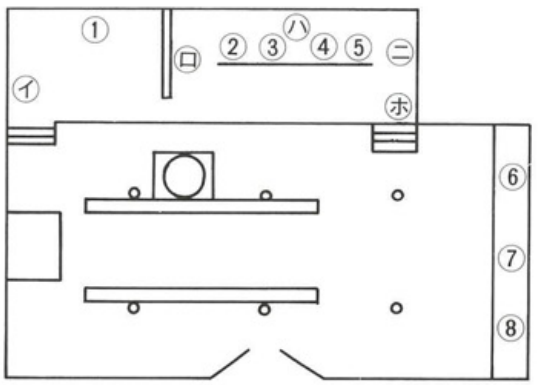


図３　スタクナ・ツォカン



3　シェーゴンパ（カギュ派）

ハカン（二階吹抜）（図４）

①釈迦牟尼像（金色、輪法輪印）６ｍの大仏、その他◯印に仏像あり。

ハカン（一階）（図５）

㋑マンダラ（中尊は四摂印）、㋺釈迦牟尼像（転法輪印）、㋩同（触地印、鉢を持つ）㋥祖師像（白色）、㋭は㋩に同じ、㋬マンダラ（中尊は四摂印に金剛杵を持つ）以下㋮㋯㋰㋱㋲㋷㋸㋹はいずれも釈迦牟尼像、順に転法輪印、智印、転法輪印、以下すべて転法輪印（但し転法輪印に二種あり）。

4　フィヤンゴンパ（カギュ派）

ツォカン（図６）

①②③祖師像、④観音像、⑤祖師像（本尊）⑥金剛薩埵像、⑦アティーシャ像、⑧リンチェンザンポ像、⑨⑩祖師像、⑪持金剛、⑫⑬祖師像、㋑㋺㋩㋬はいずれも釈迦牟尼像で阿難、目蓮を脇侍とする。順に触地印、施願印で共に鉢を持つ。㋩㋥㋭はいずれも忿怒尊である。

ハカン（図７）

①白傘蓋、②祖師像、③釈迦牟尼像、④ビルシャナ（転法輪印）、⑤弥勒菩薩像、⑥文殊菩薩、⑦金剛薩埵像⑧観音菩薩像⑨ツォンカパ像。㋑㋺㋩は共に祖師像、㋥ビルシャナ像（白色、転法輪印）、㋭阿閦如来像（青色、触地印）、㋪宝生如来像（黄色、施願印）㋬無量寿如来像（赤色、定印）㋮不空成就如来像（緑色、施無畏印）、㋯㋰㋱㋲いずれも外側の壁画で忿怒尊である。

㋷バラーヒーマンダラ、㋸マハーカーラ像、㋹観音像、㋻弥勒菩薩像、㋼釈迦牟尼像、㋽阿弥陀如来像、㋾ツォンカパ像。

図５　シェー・ハカン１階

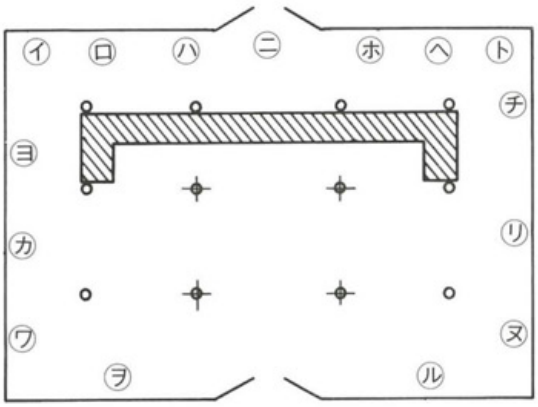


図４　シェー・ハカン

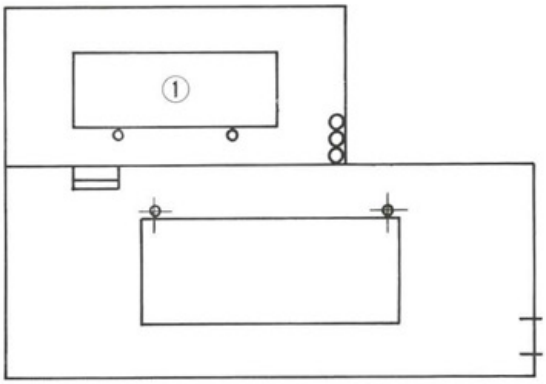


図６　フィアン・ツォカン

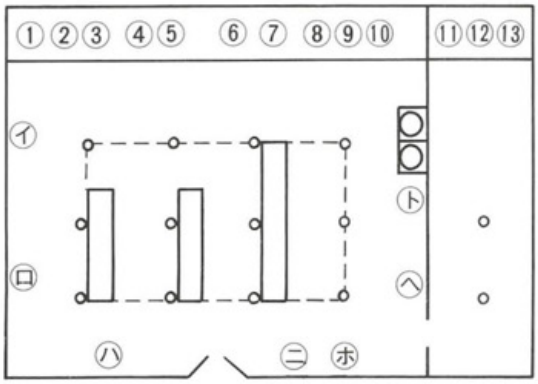


図7　フィヤン・ハカン

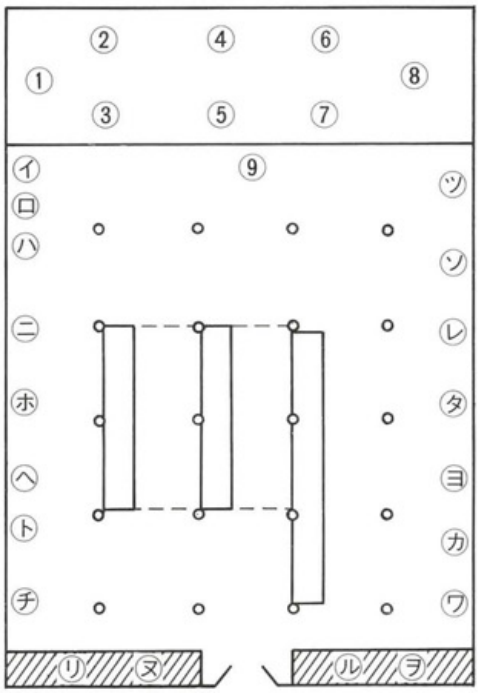


図8　フィヤン・ゴンカン

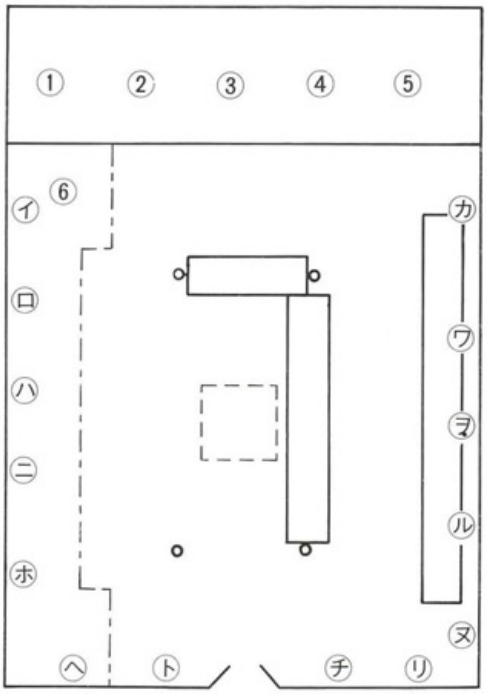


図9　サンカル・ツォカン

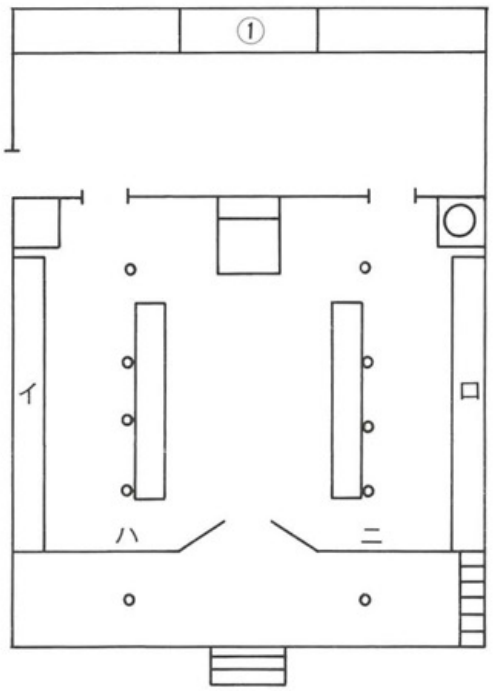
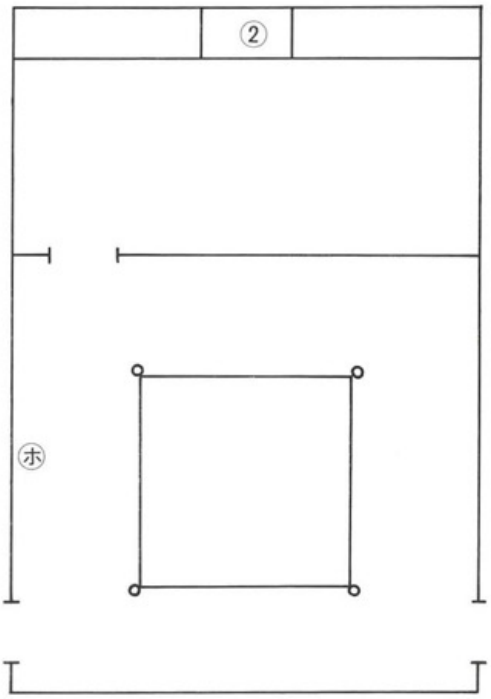


図10　サンカル・ハカン



ゴンカン（守護神を祠るお堂）（図8）

①シザン・シン・チェク、②シン・ドンマ③マハーカーラ像、④ガルーダ、⑤マハーカーラ像、⑥マハーカーラ像、㋑㋺㋩㋥いずれも忿怒尊の壁画、㋭ヤブユム像、㋬㋣共にマハーカ

図11　ティクセ・ツォカン

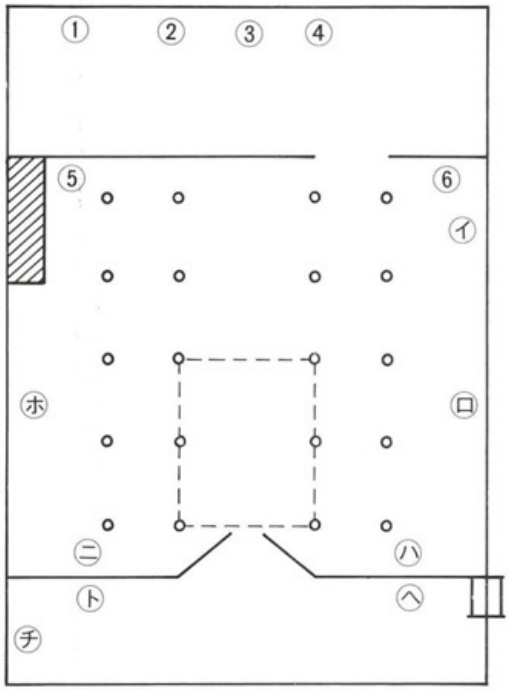


図12　ティクセ・ゴンカン

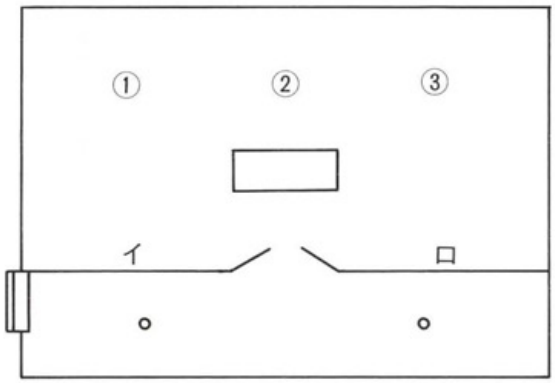


図13　スピトク・ドカン

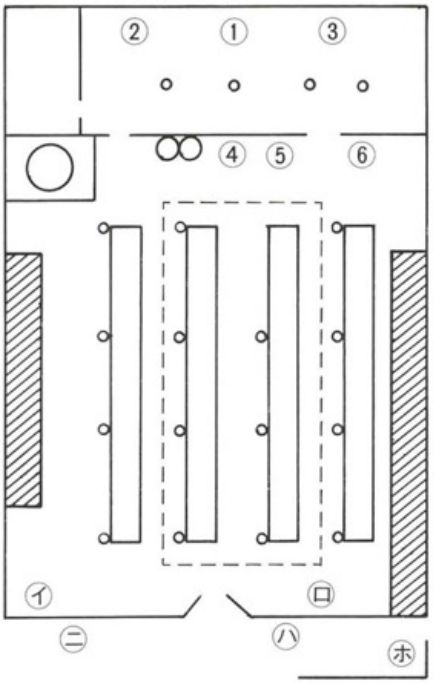
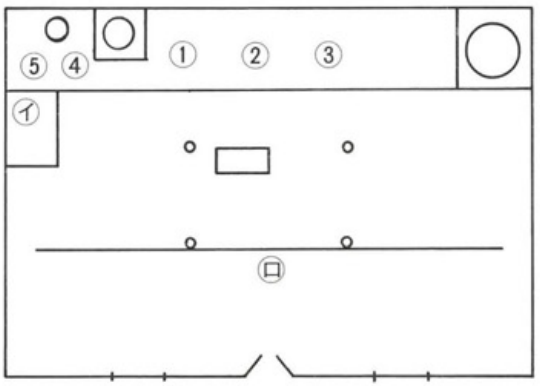


図14　スピトク・ツォカン



ーラ像、㋒㋕共にヤブユム像㋖㋗㋘いずれもマハーカーラ像、㋜㋓ヤブユム像

5　サンカルゴンパ（ゲルック派）

ツォカン（奥にハカン）（図９）

①白傘蓋　㋑五仏あり、但し印相に於いて儀軌通りではない。㋺上段に視師像(10仏)と21仏あり。下段に16羅漢像。㋩㋥マハーカーラ像。

ツォカンの吹抜の二階と奥のハカン（図10）

②白傘蓋、㋭十牛図（但し袈裟によって描かれている）

6　ティクセゴンパ（ゲルック派）

ツォカン（奥にハカン）（図11）

①白傘蓋、②弥勒菩薩像、③釈迦牟尼像、④文殊菩薩像、⑤⑥仏像あり記録なし。㋑マンダ

ラ（ジグ・ジェ）、㊁五仏、㊅㊂共にマハーカーラ・ヤブユム像、㊇忿怒尊。㊅㊆共に忿怒尊。㊈六道輪廻図。

ゴンカン（図12）

①③マハーカーラ像（５ｍ大）、②ヤマンタカ像（同大）、㊀㊁共に下段に動物の絵あり、上段に忿怒尊あり。

7　スピトクゴンパ（ゲルック派）

ツォカン（奥にハカン）（図13）

①釈迦牟尼像、②祖師像（ガラスケースに入っている）、③祖師像６体、④釈迦牟尼像（本尊）⑤ツォンカパ像、⑥ヤブユム像、㊀忿怒尊４体、㊁マハーカーラ、ヤブユム像４体、㊄㊂四天王像４体、㊇六道輪廻図。

ハカン（図14）

①グル・リンポチェ、②釈迦牟尼像、③ドルマ、④⑤グフヤサマージャ、㊀ターラー像、㊁21ターラー像のタンカが下っている。

8　リキィルゴンパ（ゲルック派）

ハカン（図15）

①白傘蓋、㊀釈迦牟尼像を囲む35仏、㊁は㊀の１部、㊄窓際に十牛図あり（但し象によって描かれてある。）㊂は㊀に同じく触地印の釈迦牟尼像を囲む35仏、㊇㊅㊆㊈十牛図（袈裟によって描かれてある。）

ツォカン（図16）

①祖師像、②舎利弗、③釈迦牟尼像、④目蓮、⑤弥勒菩薩像、⑥ツォンカパ像、㊀㊁記録なし、㊄㊂共に獅子及び馬に乗っている。㊇㊅共に牛、馬に乗る。㊆ヤブユム像、㊈マハーカーラ像。

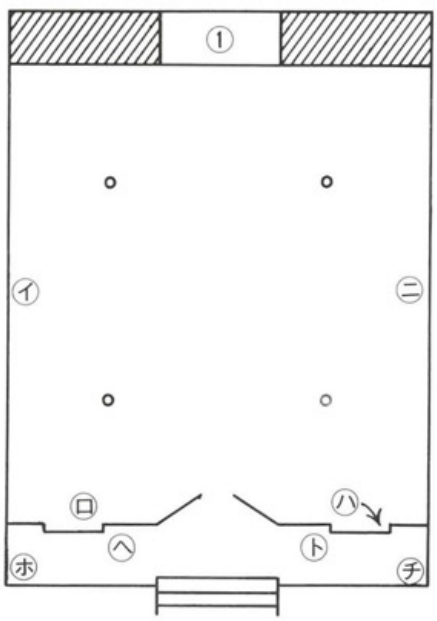


図15　リキィル・ハカン

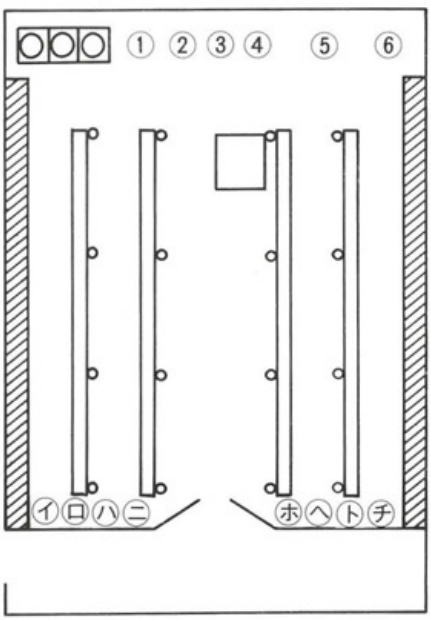


図16　リキィル・ツォカン

9　アルチゴンパ（ゲルック派）

第１堂（ハカン・ソマ）（図17）

㋑中央上段に釈迦牟尼像（転法輪印）その下に持金剛、左側に弥勒、ドルマ、右側にグルリポチェ、アティーシャ等、左右都合35尊あり。㋺㋩㋭マンダラ、㋩㋭はナム・ナンカンのマンダラに似る。㋬㋣釈尊の絵伝等あり、㋥入口の上壁でヤマンタカあり、㋖釈迦牟尼像を囲む千体仏。

第２堂（スム、チェクカン）

〈１階〉（図18）①弥勒菩薩立像（赤色）、②観音菩薩立像（白色）③文殊菩薩立像（黄色）㋑㋺阿閦如来（五頭象座、如来形、青色、触地印）とそれをとり囲む千体仏、㋩㋭文殊菩薩（獅子座、菩薩形、黄色）とそれをとり囲む千体仏、㋬㋥釈迦牟尼像（蓮座、如来形、青色、転法輪印）とそれをとり囲む千体仏、㋣㋖阿弥陀如来（蓮座、赤色、定印）とそれをとり囲む千体仏。

〈２階・３階〉（図19）

２階に10・３階に３つのマンダラあり。２階は全て方形２重のマンダラであり、３階のは内のマンダラが円形で、中尊が八葉蓮弁に囲まれる、３重及び４重のマンダラである。以下に各マンダラの特徴を表に示す。

	中　尊(印・色・等)	図　像　上　の　特　徴	形　状	尊数
㋑	白色、四面ビルシャナ、転法輪印	五仏の印相一致、男性尊	方形２重	37
㋺	〃	〃　女性尊	〃	〃
㋩	雨漏りにてはく落	左右に３尊ずつ縦に諸尊を配置	〃	〃
㋭	〃	左右に４尊ずつ　〃	〃	〃
㋬	青色、定印、	㋩に同じ、二重目のマンダラは角を除き４尊	〃	33
㋥	〃	㋭に同じ　〃	〃	〃
㋣	白色、四面ビルシャナ、智拳印	五仏の印相一致、男性尊	〃	37
㋖	〃	〃　女性尊	〃	〃
㋮	〃	二重目のマンダラは角を除き４尊	〃	33
㋯	白色、女性尊		〃	37
㋰	白色、四面八臂、転法輪印、女性尊	内２重円形（８葉・16葉）外二重方形	４重	53
㋱	白色、一面八臂、　〃　〃	内円形（８葉）外三重方形	〃	49
㋲	赤袈裟、比丘形、転法輪印	内２重円形、中尊を囲む８葉に１尊あり	３重	38

㋕釈迦牟尼座像（赤袈裟、転法輪印・如来形）①の弥勒菩薩像の上、㋷十一面千手観音立像（白色）②の観音菩薩立像の上、㋸一面多臂の立像（緑色）③の文殊菩薩立像の上。

図17　アルチ　第1堂

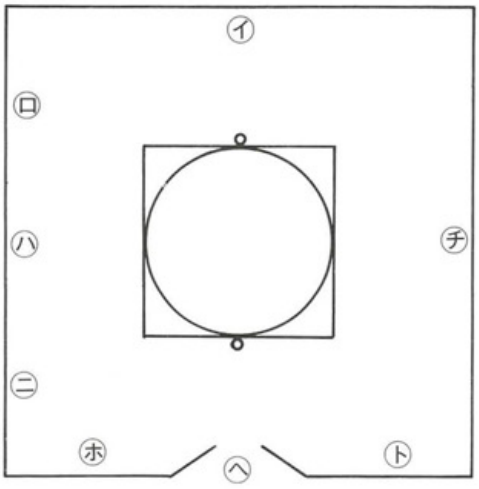


図18　アルチ　第2堂1階

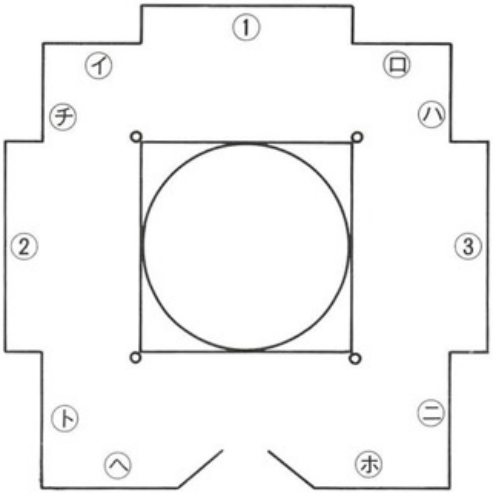


図19　アルチ　第2堂　2，3階

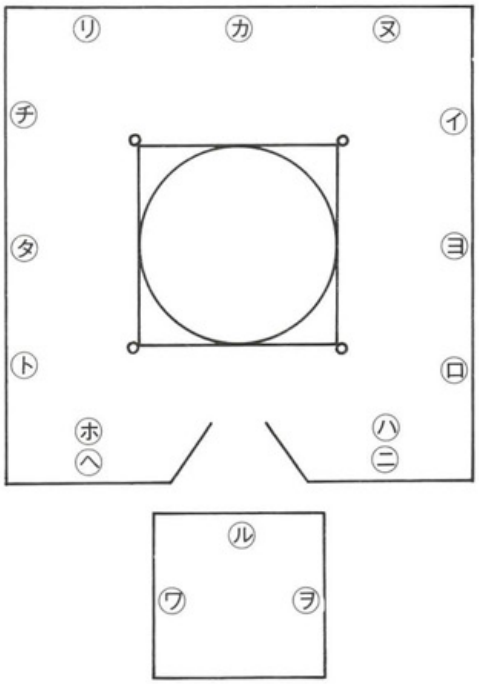
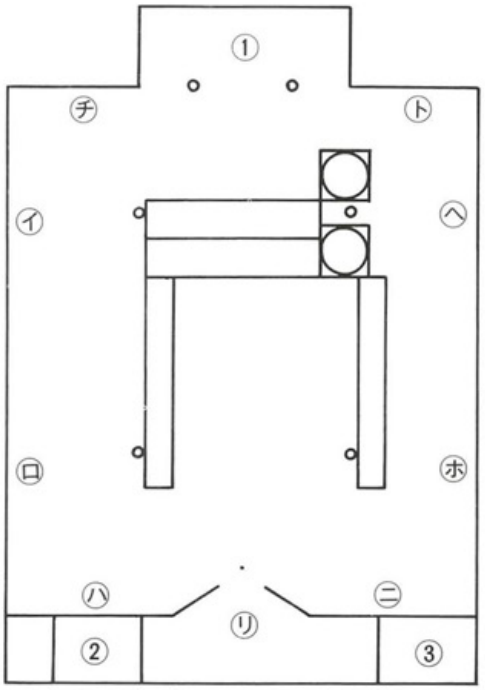


図20　アルチ　第3堂



第3堂（ナム　ナンカン）（図20）

①十一面観音菩薩座像、②白傘蓋、③観音菩薩像、㋑㋺㋩㋥㋭㋬㋫㋣にマンダラあり、㋠㋒は千体仏。

㋑	四面八臂、白色、獅子座、転法輪印	中尊は剣を持つ、文殊の一種、内八葉円形、外方形	3重	125
㋺	四面、白色、ビルシャナ　〃	内方形マンダラ内9月輪あり、その各々5月輪あり	〃	137
㋩	〃	内円形5仏の印相一致(8葉・16葉)外2重方形	4重	57
㋥	一面六臂、白色、菩薩形	内円形8葉、	3重	45
㋭	赤袈裟、如来形、転法輪印	第2堂、3階⑦に同じ	3重	38
㋬	白色、菩薩形、定印、蓮座	内円形マンダラ9分され、16葉、外3重方形	4重	105

第4堂（ロ　ツァ　ワ　ハカン）（図21）

①リンチェンザンポ像、②釈迦牟尼像、③観音菩薩像、㋑観音菩薩（白色、八葉印）㋺釈迦牟尼像（触地印）、㋩同（転法輪印）㋥マンダラ、㋭阿弥陀如来像（定印）、㋬マンダラ、㋣釈迦牟尼像とそれをとり囲む千体仏、㋠マンダラ、㋡釈迦牟尼像、㋢マンダラ

第5堂（マンジュシュリー、ハカン）

①文殊菩薩像（金色）②同（白色）、③同（赤色）、④同（青色）、㋑マンダラ2つあり。

図21　アルチ　第4堂

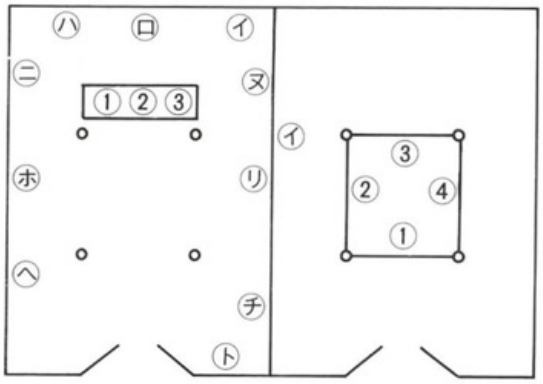


図22　マトォ・ツォカン

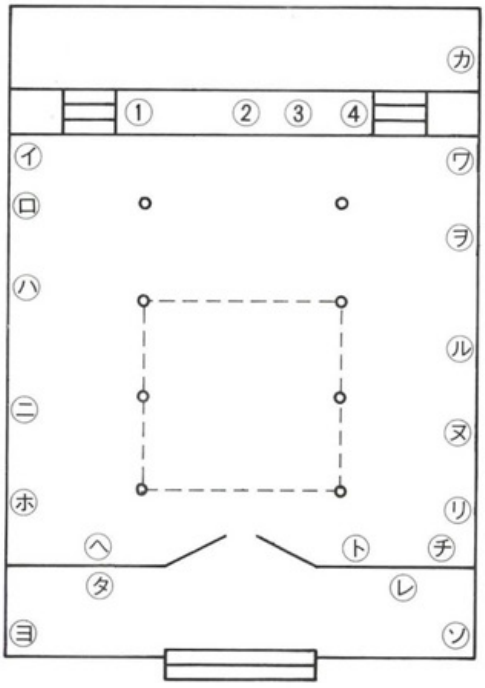
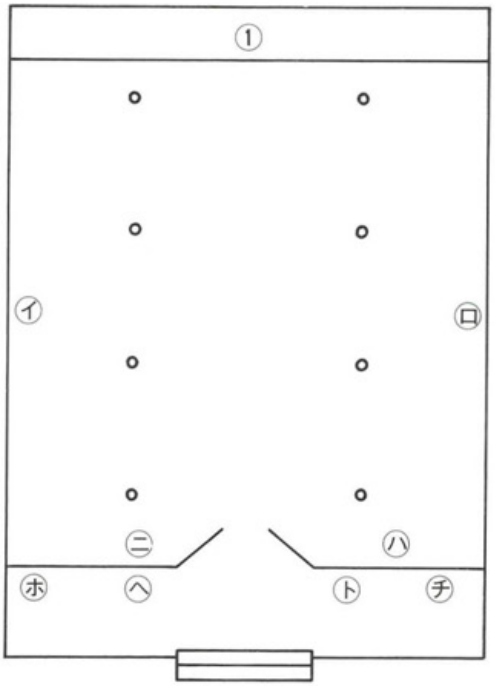


図23　マトォ・ハカン



10マトォゴンパ（サキャ派）

ツォカン（図22）

①白傘蓋、②ツォンカパ像③釈迦牟尼像、④観音像、㋑釈迦牟尼像（転法輪印）㋺㋩共に祖師像、㋥ビルシャナ（白色、四面）㋭阿弥陀如来像㋬マハーカーラ像、㋣㋠牛上　獅子上の忿怒尊、㋮観音像、㋰阿弥陀如来像、㋱㋲祖師像、㋳㋴記録なし、㋵㋶㋷㋸四天王像。

ハカン（図23）

①釈迦牟尼像（左右を小さめの釈迦像が囲む）、㋑奥に触地印の釈迦像、中央にサキャ派の祖師像等都合５体、㋺16羅漢の壁画㋩左側、四面、定印の仏、右側と㋥はマハーカーラ像、㋭㋬㋣㋠四天王像。

寺　名	宗　派	創建年代	本　尊	ヘッドラマ(リンポチエ)	僧　数
1．ヘミス	カギユ派	347年前	釈迦牟尼	トウク・セ・リンポチエ	450
2．スタクナ	〃	600年前	〃		
3．シエー	〃	500年前	〃	ヘミスに同じ	1
4．フィヤン	〃		祖　師	トク・デン・リンポチェ	50
5．レーカル	〃	600年前	白傘蓋		2
6．サンカル	ゲルック派	90年前再建	ツォンカパ	ロ・サン・ツェ・ペ	25
7．サブー	〃			バ・ク・ラ	12
8．ティクセ	〃		釈迦牟尼	ラク・ワン・テンジン	85
9．スピトク	〃	160年前	〃	バ・ク・ラ	150
10．リキィル	〃	28年前再建	白傘蓋	テン・ジク・グ・ツァ	103
11．アルチ	〃	900年前	弥勒菩薩	ダ・リ・リンポチェ	4
12．マトォ	サキャ派		ツォンカパ		65
13．レー	なし	17年前	〃	イエ・シェ・ドウム・ク	5(300)

以上、各寺院の諸堂に於ける平面図と、堂内の仏像、壁画の位置及び名称を付記した。不確定なものも多くあったが、敢えて付記して諸賢の叱正を請いたい。なお以上の平面図、仏像、壁画の名称、及び寺院リストの作成に当っては、宮寺、塚本両隊員と私の調査メモに基づき、寺院調査カードを協力して作成した。この調査カードを基に作成したものである。

特に平面図作成に当っては宮寺隊員が努力を惜しまれなかった。ここに記す次第である。また寺名、人名は、ラダックに於ける発音にならったものである。

日　　程

6／26(日)　A班6名、大阪空港出発、台北泊。

6／27(月)　B班6名A班2名大阪空港発、台北にて先発6名と機内合流、深夜ニューデリー着。

6／28(火)　インド国内航空便にてスリナガル着。

6／29(水)　自炊装備、食糧購入、ジープバス便交渉。

6／30(木)　9：00出発、12：30ソナマルグ昼食、ゾジラ峠（3600m）越え19：00カルギル着。

7／1(金)　7：30発、9：00ムルベク村石仏の調査、ナミキラ峠(3718m)、ファトラ峠(4107m)を越えラマユル村を過ぎた地点で昼食、18：00レー到着。

7／2(土)　休養日　高山病の症状が全員に出てくる。

7／3(日)　7：30シャンカル寺訪問、11：00チャンスパ・チョルテン調査　午後、市内の小寺院訪問。

7／4(月)　8：00ジープ3台にて出発9：30ヘミス寺院着ヘッド・ラマと会談。14：30ティクセ寺着一時間程の調査。16：00シェー寺着、松長他4名は仏教哲学学校を訪れる。

7／5(火)　10：00サブー寺訪問、堂内には入れず。11：00スピトク寺着。15：00フィヤン寺着。

7／6(水)　インダス川の吊り橋を越えてアルチ村へ、一日アルチ寺院の調査。

7／7(木)　A班のみ行動、10：00スタクナ寺着、調査、マトオ寺へは悪路のため行けず。

7／8(金)　A班バザール観光、B班残留調査の渉外、うちあわせ。夜、サヨナラパーティー。

7／9(土)　A班帰途につく。カルギル泊。

7／10(日)　B班マトオ寺調査、ジープとトラックを乗りつぐ。10：30着、ブンコルというお祭の日。午後、班ごとに買出し、装備分配。

7／11(月)　チョグラムサー班、難民キャンプ入り。他はリキィル寺調査。アルチ班、村入り。

7／12(火)　本部班、朝、レー寺訪問。チ班＋塚本は仏教哲学学校見学。ア班壁画撮影。

7／13(水)　本班、シャンカル寺朝勤行参加。チ班、キャンプ内の寺訪問、午後哲学学校の授業に参加。ア班、朝勤行撮影、壁画撮影。A班帰国。

7／14(木)　本班、スタクナ寺、ヘミス寺訪問、チ班、子供村（弧児院）小学校訪問ア班、村の中を歩きまわる。

7／15(金)　アルチ班レー帰着。チ班、子供村でチベット舞踊、歌などを見学。

7／16(土)　チ班レー帰着。

7／17(日)　哲学学校、校長宅訪問。

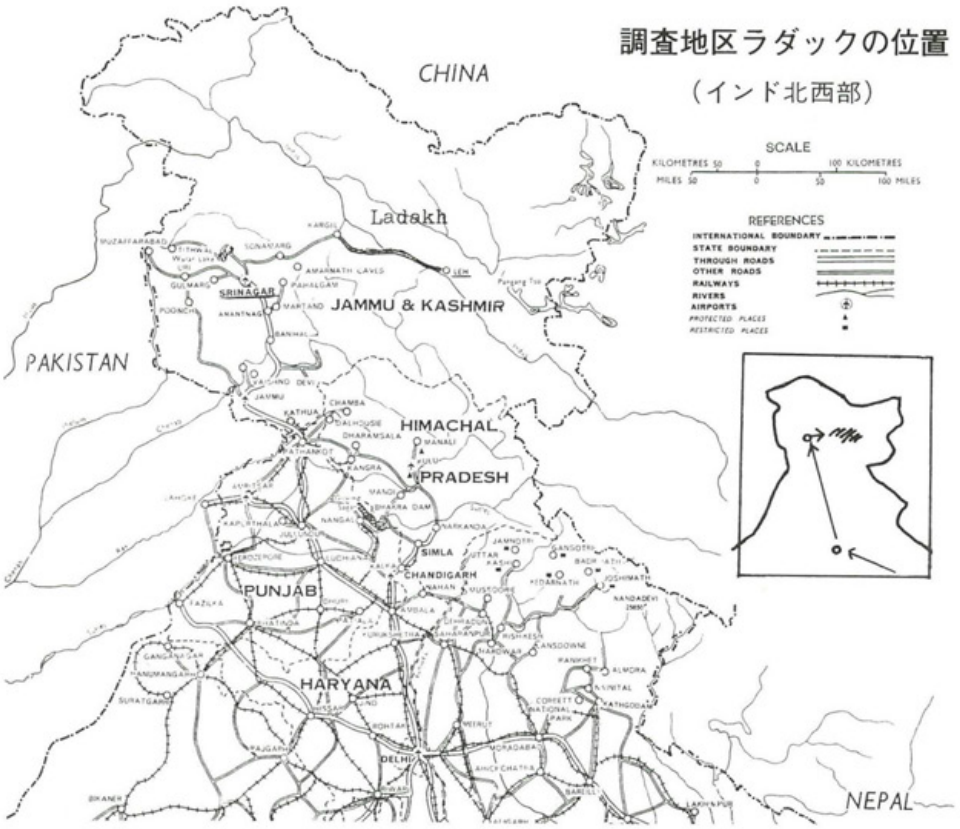
7／18(月)　民俗資料、仏具等購入。

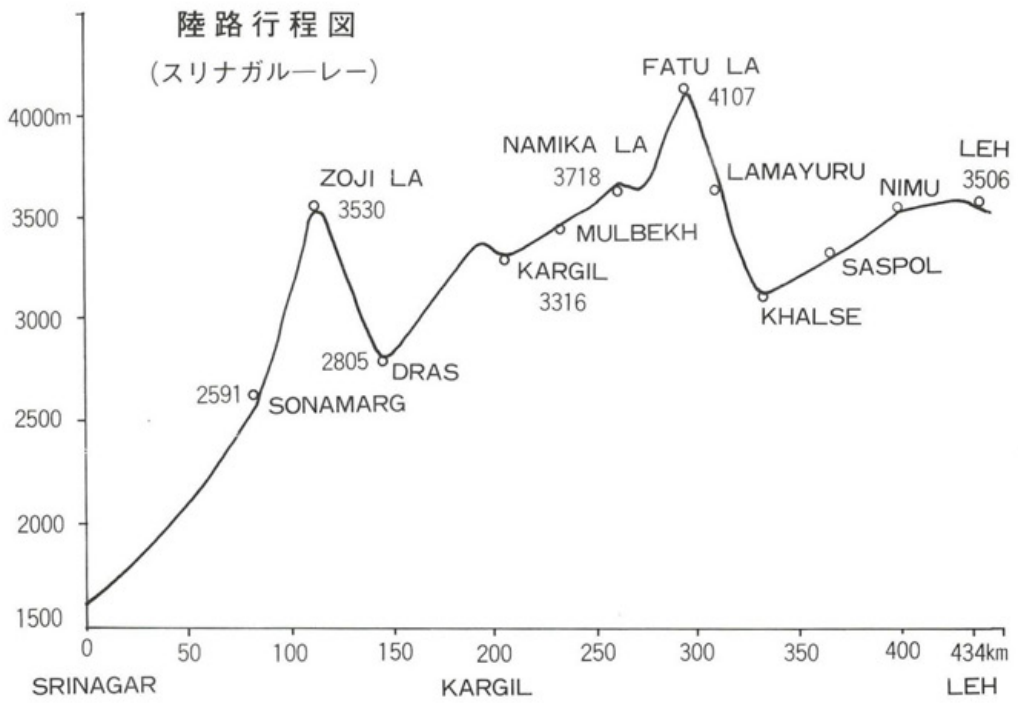
7／19(火)　朝6：00レー出発、カルギル泊。

7／20(水)　カルギル発、スリナガル帰着。

7／21(木)　休養、B班調査総括、装備品等の輸送のうちあわせ。

7／22(金)　越智先生出発。装備品帰送、学生B班の現地解散。


調査地区ラダックの位置
（インド北西部）
CHINA
Ladakh
JAMMU & KASHMIR
PAKISTAN
HIMACHAL
PRADESH
PUNJAB
HARYANA
CHANDIGARH
SIMLA
DELHI
NEPAL
SCALE
KILOMETRES 50 0 100 KILOMETRES
MILES 50 0 50 100 MILES
REFERENCES
INTERNATIONAL BOUNDARY
STATE BOUNDARY
THROUGH ROADS
OTHER ROADS
RAILWAYS
RIVERS
AIRPORTS
PROTECTED PLACES
RESTRICTED PLACES


陸路行程図
（スリナガル―レー）
4000m
3500
3000
2500
2000
1500
0
50
100
150
200
250
300
350
400
434km
SRINAGAR
KARGIL
LEH
2591
SONAMARG
ZOJI LA
3530
2805
DRAS
KARGIL
3316
NAMIKA LA
3718
FATU LA
4107
MULBEKH
LAMAYURU
KHALSE
NIMU
LEH
3506
SASPOL

装　　備　　表

品　　名		品　　名	
①共同装備		**〈遠征用品〉**	
〈幕営用具〉		リュック（スーツケース）	1
テント・ポール・フライシート	各2	寝袋	1
〈炊事用具〉		軽登山靴	1
フライパン	1	ゴムゾウリ	1
コッヘルセット	1	雨具	1
圧力ガマ	1	**〈そ の 他〉**	
ヤカン	2	パスポート	1
食器類	各14	ノート・地図・コンパス	各1
ポリタンク（10ℓ）	2	筆記具・カメラ・フイルム	
〈修 理 具〉		カギ・クサリ	1
ガムテープ	1		
ドライバー・ペンチ	各1	**③撮影装備・録音装備**	
マジック・インク	5	カメラ(ニコンFM・ニコマート)	各1
〈医療セット〉		レンズ(35mm・20mm・200mm)	各1
〈裁縫用具〉		ストロボ（サンパックオート）	2
〈そ の 他〉		三脚	1
ラジオ	1	接写リング	1
洗濯石ケン・洗濯バサミ	適量	クローズアップレンズ	1
ビニール装	適量	フイルター(スカイライトなど)	各1
		露出計（ミノルタ）	1
②個人装備		フイルム（エクタクローム）	50
〈衣　　類〉		（コダカラー）	10
上着類・下着類	各2	（ネオパンSSS）	80
セーター・ヤッケ（羽毛服）	各1	（トライX）	20
〈日常用品〉		テープレコーダー（ソニー）	1
洗面具・トイレットペーパー・	各1	マイク	2
常備薬		カセットテープ（C—90）	50
時計・ライター・サングラス	各1		

〈備　考〉
炊事用具は全て、現地購入とした。

装　備　に　つ　い　て

今回の装備品は船便などの別輸送をせず、団員が分担して持ち込める量に限定した。炊事具その他の雑品はできるだけ現地調達をすることにし、結果としては成功だった。それでも学生隊員はテント、調査機材など一人ぎりぎり20kgの持込になり、重さにあえいでいたようだ。現地での使用回数、重要度からいうと、今後の調査隊では再考するものが多々あった。テントは登山用エスパース（吊り下げ式）4人用2張と途中の事故に備えツェルト2張を持参した。レーにはホテルが完備していたので、使用したのは残留調査の一週間だけ、ツェルトは一度も使用しなかった。炊事用具も現地で購入、前半はホテルの食事以外に日本食を作った程度、後半

の部落在住組には役立ったが短い期間であれば、民家で借りても良いだろう。寝袋も冬山登山用の外国製品を持っていったが、予想に反して、日中は真夏の暑さだったし、毛布でもかまわない。どうやら、我々はラダックを誤解していた面がある。スリナガルにはラダック方面専門の旅行社もあるし、テント、寝袋等、すべての装備はそこで借りることもできる。短期間の調査では、とにかく身の軽いことが第一条件だろうから、我々は不必要に装備を持ちすぎていたのである。インド製のコンロ等は不良品もあったが、バザールの買い物で念入りに点検（彼等のように）すれば、十分使える。せっかく高い装備品を購入していったのだが、帰国時には、結局、二足三文で手放してしまった。調査機材なども欲をいえば、もっと充実すべきなのだろうが、まず最初の時は、何も持たずに行くこと。これが今後の人へのアドバイスである。

（つねだ）

録音について

テープレコーダーがコンパクトになり、性能の向上が著しい今日、野外調査という機動性を要求される場において、録音は非常な可能性を持っていると言えるでしょう。但し、その活用法、また何を録音するか？ということがしっかりしていればの話です。

まずテープレコーダーはＳＯＮＹデンスケ5500を使用しました。器械自身には問題はありませんでしたが、取扱いの点で、ほこりっぽい気候のためビニール袋を使ったり、ジープ振動などに注意しなければなりませんでした。また、バッテリーのチェックを怠ったのと、インド製乾電池の寿命を知らなかったため、録音を失敗した例がありました。

マイクは指向性と無指向性の二本を持参しましたが、インタビュー中心という調査内容に応じて、指向性を多用しました。マイクスタンドを使用せず、直接手に持ったため雑音が多かったようです。機動性を考えると難しい問題です。

テープはＴＤＫ　ＡＤ—Ｃ90を40本持って行き、使用したのは15本。あまり録音しなかったということを表わしています。

つぎに録音内容ですが、調査活動に応じて寺院が中心で、僧侶にインタビューしたものがほとんどです。僧侶の名前や年齢、寺院内の僧侶数、経典など、また仏像や壁画の名を補助メモとして聞いているのですが、なにせ声だけですので、再生しても〝はてな〟？と考えざるを得ません。その場で理解しても、後でわからなくなるので、説明を入れておくべきだったのでしょう。他には僧侶の読経や、笛（ゲリン）を吹いてもらったのや、また朝の勤行に参加して録音したものがあります。

寺院以外では、仏教哲学学校の朝礼、授業風景、子供村で民族舞踊や夕べのお祈り、それにラジオのラダック放送などがあります。

ラダック地方ということで、チベット語とその方言であるラダック語の調査というテーマを持っておりましたが、その機会が少なかったのと、録音者自身チベット語会話があまり出来なかったため、特別には録音しておりません。

（さとう）

〈会　計　報　告〉

予算総額　　**6,335,800**（単位円）

A班（8名）		一人あたり
航空券（大阪—デリー—スリナガル往復）	2,560,000	320,000
滞在費（台北、デリー、スリナガル）	320,000	40,000
◎　〃　（レー、カルギル10日分）	216,000	27,000
◎陸路交通費分担	344,000	43,000
◎団費分担金	600,000	—
計	4,040,000	505,000
B班（6名）		
航空券（大阪—デリー—スリナガル往復学割）	1,406,400	234,400
書類費	9,300	1,550
◎滞在費（全日程27日分）	354,300	59,050
◎陸路交通費分担	60,000	10,000
◎※団費補助（大学より）	120,000	20,000
計	1,950,000	325,000
寄付金		
◎本　山	200,000	
◎個　人	145,800	
計	345,800	

※学生B班の団費は大学より補助。

支出明細（◎印のみ）

総　額　2,040,100（単位円）

準備費	121,585	遠征費	1,153,499
資料収集費	34,040	A班滞在費（10日分）	196,751
渉外連絡費	33,880	B班滞在費（27日分）	304,269
事務局費	15,470	自炊装備購入費（現地）	43,536
計画書・調査手帳費	38,195	陸路交通費（ジープ、バス、タクシー）	395,936
装備費	424,647	渉外・謝礼費	34,976
録音機材費	37,980	連絡・帰送費	18,800
撮影機材費	137,520	資料購入費	134,326
フィルム費	82,200	為替差損	24,839
幕営具・その他	103,275	帰国整理費	225,250
医薬品	33,932	写真現像・焼付	140,950
食糧品	7,220	資料整理用品	56,660
手土産品	18,800	その他	27,640
荷送費	3,720	残金	115,119

備考：現地での装備品一部売却金44,160円及び残金とを報告書資金へ充てる。

調査団収集資料

物　品

1．鐃鈸一対　2．五鈷鈴　3．九鈷　4．橛　5．ティンシャ（小鈴）　6．カパラ　7．七器　8．水さしと受皿　9．水さし　10．金剛斧　11．人骨笛　12．マニ車　13．木椀　14．小刀とはしいれ　15．孔雀の羽　16．宝貝の腰飾　17．ラダック帽子（男・女）　18．ラダック上着（男・女）　19．帯2点　20．女性下着　21．ラダック半靴　他数点

書　籍

仏教哲学学校教科書　5冊、経典　3冊、英文図書　10冊、チベット語図書　3冊、パンフレット類、雑誌類　他

写　真

カラースライド　23巻、カラープリント　7巻、モノクロプリント　36巻

録　音

カセットテープ（C—90）　15巻

第一回高野山大学ラマ教文化調査団

A班

団　長　**松長有慶**（密教学科教授）47才　和歌山県伊都郡高野山 213補陀洛院
顧　問　**酒井真典**（密教学科教授）68才　和歌山県伊都郡高野山 573遍照光院
調　査　**庄司荘一**（中国哲学科教授）51才　兵庫県西宮市下大市東町198—5
調査・渉外　**越智淳仁**（密教学科講師）31才　和歌山県伊都郡高野山文化通り 318
調　査　**頼富本宏**（種智院大学）32才　兵庫県神戸市瀬区上野通り7丁目1—9
調　査　**天野宏英**（比治山女子大）46才　山口県柳井市余田1875
記　録　**広安俊道**（僧職）46才　広島県福山市北吉津 723
医　療　**西谷　正**（薬剤師）41才　広島県福山市本町8—29

B班

班長・渉外　**常多　昇**（仏教学科2）26才　大阪府茨木市庄一丁目20—1
食　糧　**小林暢善**（密教学科修2）25才　広島県尾道市東久保町3
輸　送　**官寺密正**（密教学科修1）23才　岡山県倉敷市中帯江 820
記　録　**塚本佳道**（仏教学科4）22才　広島県深安郡神辺町東中条1664
会計・録音　**佐藤元宣**（仏教学科2）20才　広島県広島市三滝山
写真・装備　**田中博之**（西洋哲学科2）22才　大阪府南河内郡河南町大宝4丁目9—37

事務局

代　表　**氏家昭夫**（仏教学科助教授）　和歌山県伊都郡高野山うぐいす谷

報告書編集委員会

委員長　氏　家　昭　夫

委　員　越智淳仁、小林暢善、常多昇

編集協力　宮寺正明、塚本佳道、田中博之、佐藤元宣

編　集　後　記

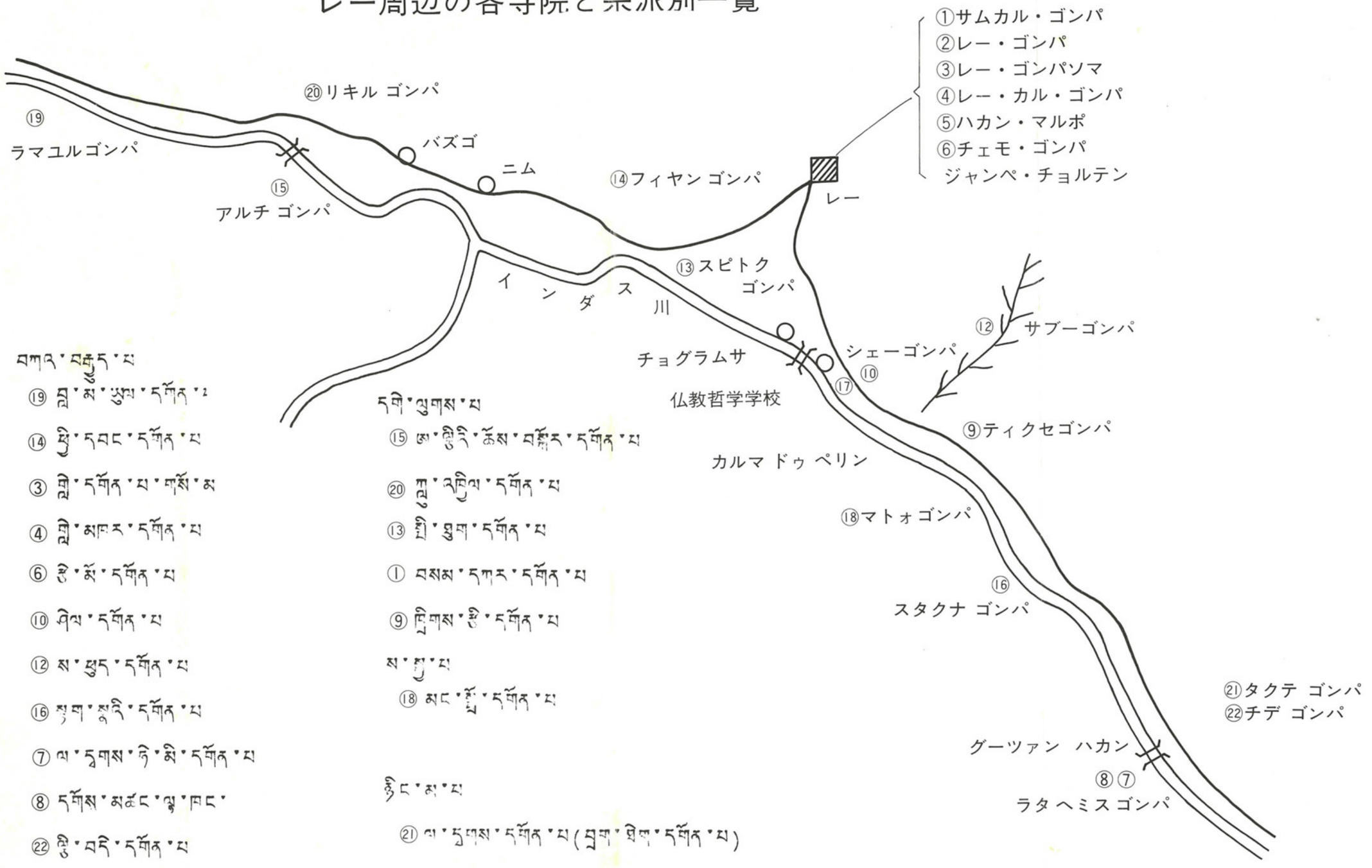
12月に入っても毎日10度以上の日が続いて今年は暖冬異変といわれたが、やっと北国の方から降雪の便りが聞かれだした。わが事務局でも待たれていた第1回調査隊の報告書をようやく完成することができた。思えばこの一年はラダックの調査準備に明け、その整理報告に暮れた感が深い。学生隊員の有志がラダック方面の踏査を計画したのは三年前であったが、学生諸君の組織と行動力では実現に程遠かった計画を今年に入り積極的に指導され支援されたのが、他ならぬ松長教授であった。教授の呼び声で学内外の協力体制ができあがり、自ら隊長となって隊を組織し、計画を練り直し、直ちに実行に移された。教授の指導なかりせば、今回のラマ教調査は実現しなかったと思う。学生諸君の意気込みもすばらしかった。かれらは計画を立案しそれを実現するために日夜資料の収集と研究を惜しまなかった。現地調査の困難さを知る人ならば、この報告書を手にされて正味わずか数週間の調査行で、よくこれだけの成果を上げえたと感心されるにちがいない。本隊の主要メンバーが隊長をはじめとして、のぞみうる斯学の権威で構成されたことと、参加した学生隊員がそれぞれの役割と分担とを忠実に守って、報告書の編集にいたるまで、隊全体の成果が充分現れるように努力したお陰である。

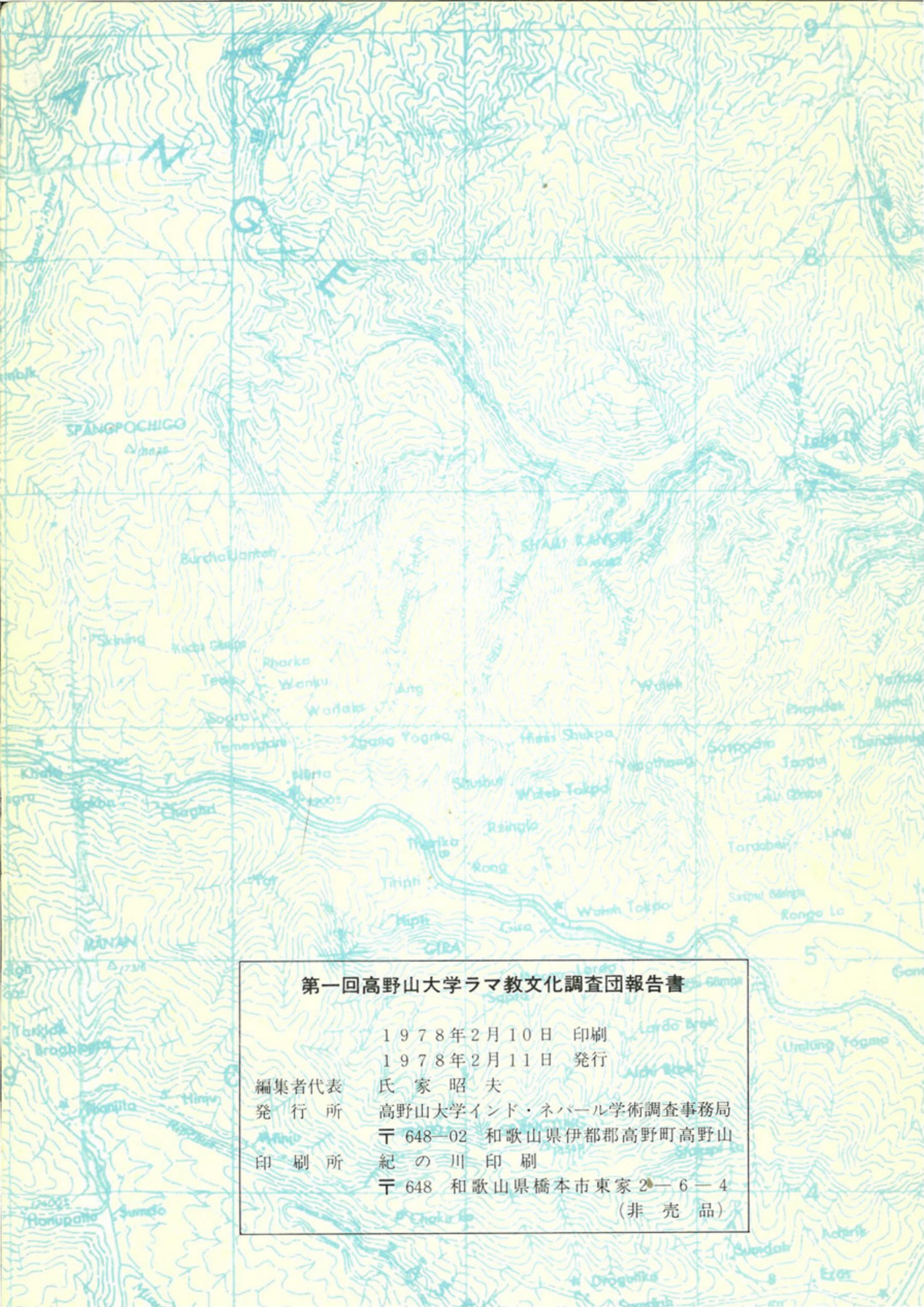
資金の面では大いに不満があった。大学当局や本山も好意的に援助をされはしたが、それは装備の一部の補塡にとどまった。各隊員は費用のほとんどを、自己負担したわけである。国の内外からも注目されている本学のこの調査が今後もいっそう効果的に継続されていくためには是非とも理解ある当局の積極的な援助を期待したい。

最後に隊員各氏の熱意ある行動ともたらされた成果に感謝し、もってその労を多としたい。

1977年12月23日（氏家）

レー周辺の各寺院と宗派別一覧





第一回高野山大学ラマ教文化調査団報告書

１９７８年２月１０日　印刷
１９７８年２月１１日　発行

編集者代表　氏　家　昭　夫
発　行　所　高野山大学インド・ネパール学術調査事務局
〒 648—02　和歌山県伊都郡高野町高野山
印　刷　所　紀　の　川　印　刷
〒 648　和歌山県橋本市東家２—６—４
（非　売　品）